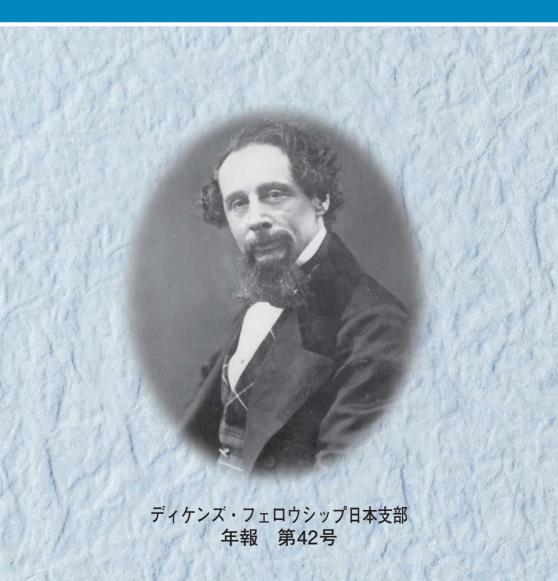
The Dickens Fellowship



ディケンズ・フェロウシップ日本支部

年 報

第 42 号



The Japan Branch Bulletin
The Dickens Fellowship

XLII 2019

The Japan Branch Bulletin of the Dickens Fellowship

No. 42

ISSN: 1346-0676

Edited by Yasuhiko Matsumoto Editorial Board

Ryota Kanayama Yasuhiko Matsumoto Takashi Nakamura

Fumie Tamai Nobumitsu Ukai

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship Department of English Studies, Kobe City University of Foreign Studies 9-1, Gakuen Higashimachi, Nishi-ku, Kobe 651-2187, Japan http://www.dickens.jp/

©2019 The Japan Branch of the Dickens Fellowship

目 次

卷頭	質言		
	ディケンズと同時代の作家たち新野	緑	1
書	評		
	Heidi L. Pennington, Creating Identity in		
	the Victorian Fictional Autobiography······宫丸	裕二	4
	David McAllister, Imagining the Dead in		
	British Literature and Culture 1790–1848 ············川崎	明子	10
	サラ・ワイズ『塗りつぶされた町 ――		
	ヴィクトリア朝英国のスラムに生きる』小西	千鶴	15
	Peter Cook, The Romantic Legacy of Charles Dickens ·········木村	晶子	21
	Joanna Hofer-Robinson, Dickens and Demolition: Literary Afterlives and		
	Mid-Nineteenth Century Urban Development ······小宮	彩加	27
	Jeremy Tambling, Charles Dickens, Nicholas Nickleby, and		
	the Dance of Death ····································	恵子	30
	中田元子 (著)『乳母の文化史 ――		
	一九世紀イギリス社会に関する一考察』瀧川	宏樹	36
	坂井妙子『メイド服とレインコート ――		
	ブリティッシュ・ファッションの誕生』三宅	敦子	42
Fel	lowship's Miscellany		
	ws and Reports		
1.0,	⟨Theatre Review⟩		
	A Christmas Carol/A Christmas Carol with Simon Callow ·······················宫丸	裕二	48
	8年度秋季総会		54
201	9 年度春季大会		61
ディ	「ケンズ・フェロウシップ日本支部規約		67
『年	報』への投稿について		69
	(ケンズ・フェロウシップ会員の執筆業績 (2018~2019)·····		70
お昆	引い合わせ先		72
	- 覧		72
編集	₽後記······		73

CONTENTS

Editorial	
Dickens and His Contemporary Writers	1
Reviews	
Heidi L. Pennington, Creating Identity in	
the Victorian Fictional Autobiography·····Yuji Miyamaru	4
David McAllister, Imagining the Dead in	
British Literature and Culture 1790–1848 ······Akiko Kawasaki	10
Sarah Wise, The Blackest Streets: The Life and Death of	
a Victorian Slum · · · · Chitsuru Konishi	15
Peter Cook, The Romantic Legacy of Charles Dickens · · · · · Akiko Kimura	21
Joanna Hofer-Robinson, Dickens and Demolition: Literary Afterlives and	
Mid-Nineteenth Century Urban Development · · · · Ayaka Komiya	27
Jeremy Tambling, Charles Dickens, Nicholas Nickleby, and	
the Dance of Death ····· Keiko Inokuma	30
Motoko Nakada, A Cultural History of Wet Nurses: a Study of	
British Society in the Nineteenth Century ····· Hiroki Takikawa	36
Taeko Sakai, How Britain Became a Nation of	
Gentlemen and Ladies in Style · · · · Atsuko Miyake	42
Fellowship's Miscellany	
News and Reports	
⟨Theatre Review⟩	
A Christmas Carol/A Christmas Carol with Simon Callow · · · · Yuji Miyamaru	48
Annual General Meeting of the Japan Branch 2018·····	54
The Japan Branch Spring Conference 2019	61
Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	67
Publications by Members of the Japan Branch, 2018–2019 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	70

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 (2018-2019)

2018 年度秋季総会

日時: 2018年10月13日(土)

会場:UNITY (ユニティ)

「神戸研究学園都市 大学共同利用施設」2階 セミナー室4

プログラム

理事会(13:30-14:00) 総会(14:05-14:25)

第1部 研究発表 (14:30-15:10) 司会:長谷川雅世(高知大学)

発表:筒井瑞貴(神戸大学) Barnaby Rudge における偽装と犠牲

第2部 特別研究発表 (15:15-15:55)

司会:金山亮太(立命館大学)

発表:桐山恵子(京都府立大学)ターヴィドロップ舞踊学院の徒弟の行く末 ――『荒涼館』および『リトル・ドリット』におけるダンス分析 ――

第3部 ミニシンポジウム (16:15-17:20) ディケンズ批評の現在

司会: 玉井史絵(同志社大学)

講師:小西千鶴(神戸市外国語大学)

講師:瀧川宏樹(大阪工業大学)

懇親会 (17:40-19:40)

会場:神戸市外国語大学 三木記念会館

2019 年度春季大会

日時:2019年6月8日(土)

会場:清泉女学院短期大学フランシスコ館 103 教室

プログラム

第1部 ミニレクチャー (14:10-14:50)

司会:田村真奈美(日本大学)

講師: 寺内 孝 (独立研究者・出版工房奥山舎代表)『エドウィン・ドルードの

謎』をどう読むか

第 2 部 講 演 (1. 15:10-16:10 / 2. 16:30-17:30) Ephemeral Dickens

1. 司会:玉井史絵(同志社大学)

講師: Clare Pettitt (Professor of Nineteenth-Century Literature & Culture, King's College London) Print and Performance in Dickens's Sketches by Boz

2. 司会:金山亮太(立命館大学)

講師:Kate Flint (Provost Professor of Art History and English, University of Southern California) Pavement Art and Impermanent Fiction

懇親会(19:00-20:30)

会場:イタリアン・レストラン LOGIC

巻 頭 言

Editorial

ディケンズと同時代の作家たち

Dickens and His Contemporary Writers

日本支部長 新野 緑

Midori NIINO, President of the Japan Branch

来年はおよそ半世紀ぶりにオリンピック、そしてパラリンピックが日本で開催されるとして、国をあげて大々的な PR が行われているが、その 2020 年は、ディケンズの没後 150 年でもある。生誕 200 年の 2012 年 2 月 7 日には、ウェストミンスター寺院で、ディケンズの子孫やチャールズ皇太子夫妻を招いて盛大な記念式典が催され、生誕地のポーツマスでもサイモン・カロウやシーラ・ハンコックが『デイヴィッド・コパフィールド』や『オリヴァー・トウィスト』の一節を朗読して、国民的作家の偉業を讃えた。グーグルのロゴがその日 1 日ディケンズ仕様になっていたことを覚えておられる方も多いだろう。ディケンズが、今なお世界中の人々に愛され、インパクトを与えている偉大な作家であることを改めて実感した 1 日だった。

生誕記念に較べると、没後記念の祝賀気分は幾分控えめにと考えてしまう.とはいえ、生誕記念時の支部長の原英一先生が力を注がれた Dickens in Japan (大阪教育図書) のような大きな企画はできないまでも、少なくとも来年の二つの大会は従来にも増して充実したものにしたいと心がけてはいる。会員の方々には研究発表をはじめとして積極的に参加していただければと願っている。

考えてみれば当然のことながら、こうした節目の年は同時代の作家にも同時期に訪れる。今年生誕200年を迎えたジョージ・エリオットの場合は、ローズマリー・アシュトンの基調講演を皮切りに104名ものスピーカーが参加する国際学会がレスター大学で3日間にわたって開催され、日本からも多くの研究者が研究発表やパネルを行なったと聞く。2010年のギャスケル、その翌年のサッカレー、17年のオースティン没後200年を挟んで、16年のシャーロット、18年のエミリー、そして来年はアン・ブロンテの生誕200年と、およそ10年の間に立て続

けに記念の年を迎えることになる。作家によって執筆時期に若干ズレはあるものの、イギリス小説を代表する才能がディケンズの時代にいかに綺羅星のごとくひしめいていたかが分かる。

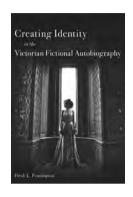
しかも、それらの作家たちは、個々の文学理念や人間関係、生活環境や経済状 況などが複雑に絡み合う中で創作活動を行っていた。出自も教養も気質も対照的 なライバル作家として、相手の並外れた力量を認めつつも微妙な緊張関係を保っ てきたディケンズとサッカレーが、1848年の「文学の尊厳」をめぐる論争や、 1858年の「ギャリック・クラブ事件」を経て、決定的な断絶に至ったことは有 名だ、また、ディケンズが「親愛なるシェヘラザード | (1851 年 11 月 25 日付書 簡) と呼んで、ストーリーテラーの才能を高く評価したギャスケルは、ディケン ズに請われて『ハウスホールド・ワーズ』に多くの作品を寄稿したが、『北と南』 の改稿をめぐる意見の対立や、自作の幽霊物語のアイデアを盗用されたとの思い から、ディケンズとの溝を深めていった、そのギャスケルが深い親交を結ぶ シャーロット・ブロンテは.処女作『ジェイン・エア』を読んで彼女の才能を認 めたサッカレーを叶わぬ恋の相手エジェに通じる理想の師と仰いで、実像との ギャップに苛立ちながらも生涯に亘って彼を崇拝し、一方のサッカレーは、 シャーロットの文学的才能を認めながらも. 『ジェイン・エア』の匿名作家が彼 の愛人だとする風評や、シャーロットによる一方的な理想化に辟易して、彼女に 皮肉な態度をとり続けることになる.一般にもよく知られるこれらのエピソード は、それを証拠づける作家の書簡や伝記もまた、個々の書き手の思惑によって多 分に色づけされた可能性も否定できないが、当時の作家たちが形作っていた文壇 の複雑な人間関係の一端を垣間見せて、まことに興味深い、

さらに重要なのは、これらの作家たちが実際に書いた作品間の密かな連関である。たとえばジョージ・ヘンリー・ルイスは、オースティンを高く評価して、その作品をジョージ・エリオットと一緒に読んだというが、ルイスからオースティンを読むよう勧められたシャーロットは、彼女の作品を「ありふれた顔の銀板写真のように正確な描写」にすぎないと批判し、その1848年1月11日付のルイス宛ての書簡が、ギャスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』に引用されている。しかし、オースティンについてほとんど言及のないギャスケルこそが、じつは晩年の自伝的な作品『妻たちと娘たち』で、『マンスフィールド・パーク』の人物造形や構造を援用しており、ディケンズもまた「ギャズヒル覚書」と呼ばれる作者不詳のメモで『ジェイン・エア』を読んでいないと主張しているものの、多くの批評家も言うように、『デイヴィッド・コパフィールド』の主要なモチーフや細部の描写を見れば、単なる偶然の一致とは思われない、「ドイツ生活の博物史」でディケンズの外面描写を批判したエリオットの『フロス河畔の水車小

屋』は、トムとマギーの兄妹関係などが『辛い時代』のルイーザとトムの姉弟の人物造形に通じる。さらにディケンズと素人演劇で共演し、趣味や文学的理念の齟齬はあっても友好関係を維持していたはずのルイスは、その「ディケンズと批評」(『フォートナイトリー・レビュー』1872年2月)によって以後のディケンズ批判の先鞭をつけ、こうしたインテリ批評家と大衆との評価の隔たりを目の当たりにしたギッシングは、読者層の急激な拡大によって自身が陥った創作のジレンマを、『エドウィン・ドルード』の主人公の名を借りた二人の主人公の葛藤を通して、『三文文士』で描いてみせた。

ここに示した作家たちの連関の糸は、その一端にすぎないが、こうした同時代作家たちの意識的無意識的な他作品の援用とその背後に広がる複雑な人間関係は、いわゆる歴史や文化に匹敵する、躍動感に満ちた創作のネットワークを私たちに垣間見せるようにも思われる。少なくとも、こうした視点は、並みいる作家たちの中でなぜディケンズなのか、という素朴ではあるけれども文学研究において核心的な問いへの、私なりの答えを探る手がかりを与えてくれるように思っている。

書 REVIEWS



Heidi L. PENNINGTON,

Creating Identity in the

Victorian Fictional Autobiography

(Columbia: University of Missouri Press, 2018),

x+229 頁. ISBN: 9780826221575

(評) 宮丸裕二 Yuji MIYAMARU

英国ヴィクトリア朝という時代を考えるのに、小説、それも自伝的な小説というものは長らく考察の対象にされてきたし、多くの書籍が出版されてきた。自伝的小説を考察すれば、この時代に重要なものとなった個という自我が見えてくるだろうという期待からであろう。デイヴィッド・コパフィールドやジェイン・エアのことがこれまで何度も語られてきたゆえんである。本書もそうした研究書の一つである。膨大な研究が重ねられてきたこの研究ジャンルに、それでもまた一冊が追加される意義を見ることができるのは、本研究書が理路整然とジャンルの分析から入っているからである。

本書のポイントは、人がアイデンティティというものを作り上げるにあたって、その過程で「語り」というものが必要になってくるというところにある。その「アイデンティティを作る」というのは書籍の中で読者が共通に理解し、想像できる人物造形を文字の上で作ったということだけを言っているのではなくて、現実世界での「自分という人間を作り上げる」というところまでを問題にしていて、小説というのは文字を使ったその派生形に過ぎないという話なのである。つまり、「私は責任感を持った一人の社会人として」と自他に言い聞かせている時にも、「私は女だけどサバサバしている方なので」と自分で勝手に選んだ自己評価を周囲に宣伝している場合も、「私はだらしなくて、つい人に甘えてしまうところがあるので」という自己定義をすることで逃げ道を用意して将来のリスク管理に努めている際も、「私という人間はとても自信に欠けていて、いつも自己嫌悪ばかりなんです」と抑えても抑えても湧き上がってくる自己顕示欲をなきものと扱ってはそれを必死で人から隠そうとする時も、本当はそれが嘘であったり、正反対

の要素を持ち合わせていたり、明らかに違う見方をしている人がいたとしても、そう言ってさえしまえば、「責任ある」、「サバサバしている」、「甘えがちな」、「自分が嫌いな」というそれぞれの理解は可能になるし、そういう自己描写の積み重ねの上に自分についての理解を成立させ、ひいてはこの世界を成立させている。その意味で、この世のすべてはフィクションである。説明さえしてしまえば、頭が悪い人も良い人であるものとして通ってしまうし、仕事ができる人だってできない人に容易になり得るのだ。理解が可能である以上、人格はすでに構造的であり、そう説明されているものなのであり、本質的に虚構的なのである。そして、そのプロセスは小説という芸術の中で繰り返されているし、小説あるいは自伝的小説は現実世界でなされている自己構築の雛形にそのままなっているというのである。その中で、実態がどうであるかはあまり問題ではなくて、そのように「語ること」が人のあり方を作るのだ。

実際にその通りなのである。ただし、そのことが本書においてだけ得られる知見かというと私の知る限りそうではないし、そのことは本書が備える第一の意義では恐らくない。むしろ、本書の意義としてより重要な点は、その論じる道筋において、自伝的小説の形態を新たに考え直して、そのジャンルとしての位置づけを著者なりに試みている点である。このジャンル定義はただ呼び直しただけの無意味な営みではなくて、そうすることで新たな理解を促進するもので、それで初めて分かってくることがきちんとあるのである。本書が意義深いのはまさに著者が自身によるジャンル理解を提唱している点であると私は思っているし、今後のこの分野の研究につながっていくだろう。本書の序章におけるジャンル定義と第1章におけるその定義においてこのジャンルの持ち得る意味を再考している部分がそれに相当し、それは書籍全体の一部に過ぎないけれど、最も重要な一部である。

この点が重要だと私が思うのは、自伝や自伝的小説の研究に際して、ジャンル定義がうやむやにされ、ジャンル分類が混沌としたままに、この分野の研究が重ねられてきてしまったという経緯があるからだ。試みに、実に多く出版されてきたこの手の研究書のいずれでも手に取ってぱらぱらとめくってみればすぐに分かる。歴史書も伝記も、自伝も小説も、自伝的小説も回想録も、すべてがごっちゃにされてしまっていることが実に多い。自伝的小説と自伝の形式上の違いを無視して語る傾向、無条件に近現代小説を「書き手自身の話」と捉える向き、内容の信憑性において伝記と自伝の差を考慮に入れない例など、非常に多くを見ることになる。日本語で書かれた研究書に至っては大半がそうだとさえ言えて、定義や分類という作業を放棄しているのは、そもそもその必要性を認めていないからだろう。「そう論じたい気持ちは分かるけれど」という読者側の歩み寄りなしには

とても読めない研究書が多く登場するのは、その書き手にジャンル認識の重要性についての教育が恐らく欠落していたからなのだろう。詩を論じる際にまず形式の分析から始めないとどうにもならないというディシプリンが欠落したまま書かれる詩論が登場してしまうのと同じく、研究者養成の教育事情が背景にあるのだろう。

さて、このジャンルの考えについて、本書が問題にし、提唱するところを簡単にご紹介することにしよう。まず、伝統的には、執筆にはノンフィクションとフィクションがあり、その「ノンフィクション」(non-fictional writing)の中に事実を記述する (あるいは少なくとも事実と想定される内容を記述する)「歴史文書」(historical document) がある。その歴史文書の中に特定の一人物にスポットを当てて記述を展開する「伝記」(biography) というものが含まれる。さらにその伝記の中でも書き手が自分自身のことを記述する伝記である「自伝」(autobiography)が一部として含まれることになる。当然ながら自伝はノンフィクションに属するということになる。一方で、「フィクション」(fictional writing)の方であるけれど、このフィクションこそは歴史上のいくつかの場所といくつかのタイミングで人類が開発した相当な発明品ということになるわけだが、その中の大きな一つとして「小説」(novel; fiction) という形式がある。そしてその中に、群像劇ではなく一人の人生の成り行きにスポットを当てて話が進む「教養小説」(Bildungsroman)というものがある。したがって、一人の主人公の人生やその成長を描く教養小説は飽くまで虚構なのである。

そこで、本書が問題にする「自伝的小説」(autobiographical novel; autobiographical fiction) ないし「小説的自伝」(fictional autobiography) はどこに属するのか. 「自伝的小説」(ないし「自伝的虚構」) と呼ぶか、それとも「小説的自伝」(ないし「虚構的自伝」) と呼ぶのか、それ自体がこの分類作業に深く関わってくる. このジャンルは、作り話である小説の形式を取っている限りにおいて虚構であり、その中で自伝の形式をとって語り手が自分を語る限りにおいて自伝というノンフィクションのかたちを持っていて、実に二つの大きく違うジャンルの要素を兼ね備えているのである.

そして、このジャンルは伝統的にはノンフィクションである自伝の一ジャンルとして捉えられ、「著者が、何らかの事情から自分の名前を伏せつつも、内実としては自分のことについて記している、実質内容としては事実を記載した自伝の一バリエーションである」と理解されることが多かった。つまり、虚構のベールを部分的に借りたノンフィクションであるという理解だ。ところが、本研究書では、「自伝的小説」を「虚構的自伝」と呼び直し、自伝の下位分類ではなく、フィクションとしての小説、その中に含まれる教養小説の下位分類に置き直すの

である. つまり,「恐らく著者自身のことを書いたらしいところが目立つけれど, 自伝とは異なって虚構の形式を持ち,虚構の存在である語り手による虚構である 自身について記述する体裁を持たせた,根本のところで作り話であるタイプの執 筆」という理解に立つのである.

要するに、本書が提唱するところでは、自伝的小説を匿名化しフィクショナライズした自伝としてではなく、はじめから虚構作品で自伝っぽく自分が語ってはいるが小説の一ジャンルなのだと捉え直そうということだ。両側面を備えているものの、自伝的小説というのは、その内容も成り立ちも書かれる動機づけや目的もそれだけ小説との親和性が高く、自伝よりもフィクションに影響された芸術形式だということだ。

とはいえ、この指摘そのものは新しいものではなく、有名なところではフィリップ・ルジューンがその親和性は指摘しているし、先に挙げた多くの研究書の著者らだって「言うまでもなく、はじめからそういう認識で研究していましたけど」と主張する場合も少なくないだろう。しかし、本書ではその定義と分類を怠らなかったことに、まず一つ目の意義がある。

考えてみれば、虚構として発表される一人称形式の小説とノンフィクションを うたう自伝との区別をどうつけることができるのか、一方が作り話で、他方が実 話だと、内容から断定することができるだろうか、そこはルジューンもドリッ ト・コウンも、作品が現れるその度に読者が決めてきたという。本書がなかなか に古い受容理論を参照して論を展開するのにはこうした事情が関わっている. 小 説として捉えられたその時に、小説性を備えるのだという説明が是非必要なのだ. そして、もう一つ、こうして明確にジャンルの特質を抑えておくことの確実な 利点は.そうすることで.次なる分析が可能になるところである.本書の中で続 く議論として出てくるのは虚構として書かれた自伝に見る「語る主体としての虚 構なる主人公」(writing self) と「書かれる主人公」(written self) についての分析 である、これは一般的な小説では互いに分離して考えてもごく自然である二つの 主体であるけれど、自伝においてはそうではない、伝統的には自伝においては、 この二つは互いに分かち得ない同じ存在として考えられているからである。とこ ろが本書では、最初のジャンル定義で虚構的自伝を小説の下位分類に位置づけ直 したことでこうした分析が可能になっている。伝記や自伝というジャンルの中だ けで考えていると出てこない議論であって、ただ単に呼び方を変えただけではな いのである.

このように書く主体と書かれる主体を別物として分けたところに出てくる議論では、例えばデイヴッド・コパフィールドもジェイン・エアも、その語りの技術によって改めて注目されることになる。語られる人物としてのデイヴィッドや

ジェインは平凡であっても、その語り口によって非凡になるからであるし、またその語りは読者に語りかけ、読者の考えを先回りして拾うというような読者との意見交換を絶えず行う存在である点でも語られる存在と一線を画している。この点の分析を成功させた勝因を考えると、やはりジャンルの定義から考え直したところに遡るのであって、それを抑えてこそこうした分析に至り、当初から問題にしているテーマである「アイデンティティがいかに作られるかという過程」を示すことを達成しているのだから、やはりその点で成功している研究書であり、中身のある本なのだと言ってよいのではないだろうか。

もちろん、本書を通読すれば、欠点に映るところがあることも否定できない. 先の虚構であるかどうかの判断を読者に委ねるところまではいいとして、実際に 虚構であることが読者に自明であるかどうか、読者がどう捉えていたのかという、 その先の具体的な議論が欠けている.また、序章の定義の部分において多くの思想家や批評家に言及があるが、果たしてそうした人々による言説を薄っぺらに参照しつつ論じる必要があったかどうか、その議論の内容と必ずしも関係が見えなかったりするのを見ると、疑問の残るところである.

さらに、第2章から第4章は、具体的な自伝的小説作品を対象としての論が展開されるが、それを、それぞれブロンテ論、ディケンズ論、それらの作品論として見るなら物足りないところがあるのは否めないし、これらの作品についての批評を読んできた者からすると当たり前過ぎることにかなりの紙面が割かれていると思わざるを得ない。あるいは、どうやらディケンズならディケンズの割と限られた作品しか読んでいないようで、数多くの他の先行作品での類例があることを前代未聞で画期的であると捉えていたり、同じことを言うにもより適切な例が他作品にあるのを見落としていたりという場合もある。全体に、言いたいことに対して、適切にフィットしない例を選んで例示してしまっていることが多く、例と論がちぐはぐな部分も散見される。また、内容だけではなく、言葉選びにおいても同じこと指すのにタームが変わり続けたり、言葉選びが適切でないために不必要な読み返しが本当に何度も必要になったりという点では、読みやすくないところも多い。

第4章で語りに関係させてジェンダーの話になったのはいいとしても本来最も 展開するべき議論からずれて行ってしまって戻って来なくなってしまうところや、 突如として時代の文化全体の考察に議論がシフトしてしまうなど、議論の目的や その向かうところを読者に見失わせてしまう面も大いに気になる.

以上のようなことがありながら、しかし、先に述べた点から、本書の意義はそれでもなお深いものと言ってよく、本ジャンルに属する研究書の中でも重要な一冊であると考えている.

書評

9

ところで、冒頭に言うように、ヴィクトリア朝の研究者は一人称小説が昔から大好きなのであるけれど、考えてみると分かるとおり、三人称小説というものも根本の枠組みではその実、一人称小説なのであって、本書のような議論を延長していくならばその必然的な向かうべきところとして、三人称小説も同じテーブルに載せて議論をすることが是非必要になるはずなのである。これは単なる小理屈だけの問題ではなく、三人称小説の著者のペルソナということもやがて同じレベルで問題とされるのが筋なのである。そうなると、飽くまで例外的な特別な形式として本書で扱われている虚構的自伝の語り手のあり方という問題は、実はノンフィクションやフィクションの境界に関係なく、あらゆる執筆に偏在し必ずやどこにも関係してくる根本的な問題なのである。本書は虚構的自伝という小説の一つのサブジャンルに対象を絞って論じているものの、本来はそうしたことに広がり得る大問題を扱っている研究書なのである。



David McAllister.

Imagining the Dead in British Literature and Culture, 1790–1848

(viii+227 頁, London: Palgrave Macmillan, 2018 年, 本体価格£50.39) ISBN: 9783319977300

> (評) 川崎明子 Akiko KAWASAKI

学部生だった頃「イギリス文学史」の授業で『骨董屋』について習った際、「ネルを死なせないで」という嘆願が読者から殺到したことや、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde) が「ネルの死を笑わずにいるには石の心臓が必要だ」と言ったことを知り、強い印象を受けた。その印象を胸に、初めて『骨董屋』を読んだ時、とても驚いた。ネルの死が重要であるはずのこの小説に、ネルが死ぬ場面がなかったからである。ネルの死期が近いことをうかがわせる記述や、死後横たわっている場面はあるが、臨終そのものの描写はない。かわりに、最後に到着した村の教会墓地などで、ネルが死に思いを馳せるところは、随分と詳しく描かれている。これは一体どういうことか。『骨董屋』を扱う本書の第5章は、ネルの臨終場面の欠落については直接触れないが、ネルが墓地で死を想う様子が詳述される理由については十分に答えるものであった。そしてその答えは、評者の『骨董屋』観を一新した。

本書は、ロマン派からヴィクトリア朝初期における、死者のイメージを変革する試みを辿るものである。近年「死」をめぐる研究が盛んになっているが、本書はその未開拓分野に挑戦した野心作である。その未開拓分野とは、「死者」といっても、既に多くの研究がなされてきた「個人としての死者」ではなく、「集合的な死者」を扱うことである。集合として把握される死者といえども、抽象化された死者ではないので、物理的実体を持つことに変わりはなく、生きている人々は、「死体」をどう扱うべきか、墓地をどうするかという即物的な問題に現実的に対処しなければならなかった。生者と「死体」の関係を分析するという点では、本書は近年盛り上がっている Thing Theory の一実践でもある。

本書は全6章構成である。独立した序章はなく、第1章が「序論」と称されているが、厳密にはその前半が実質的な序論であり、後半は本論に入っている。最

後の第6章 "Conclusion"は最終コメントを記すごく短いセクションであるので、ここでは第1章から第5章までを紹介したい。それも第1章から第4章までは、『骨董屋』について考察する第5章の議論にできるだけ関連する形でまとめ、最後に本誌の読者が最も興味を持たれるであろう第5章については、より細かに述べることにしたい。

まず第1章 "Introduction: Revolutionizing the Dead: Burke, Paine, De Quincey"の前半では、本書の目的、アプローチ、対象とする範囲が説明される。ロマン派から初期ヴィクトリア朝における「死者」は二つに大別でき、一つは知己のある個人の死で、文学関連ではシェリー (Percy Bysshe Shelley) にとってのキーツ (John Keats)、ディケンズにとっての義妹メアリ・ホガース、ヒースクリフにとってのキャサリンなどが容易に思い出される。生者の特定の死者への思慕は、庭園墓地の彫像や墓碑銘、幽霊譚や降霊術会にも表れている。もう一つが匿名で群衆的な死者であり、現在における過去の象徴であり、数の上で生者をはるかに上回ることから、生者に脅威を与えかねない存在であった。この集合的死者は、宗教改革でカトリックの煉獄の概念が廃れると、生者に祈祷を要求する存在から、生前社会に貢献した世俗的な存在に変容した。とはいえ死者にまつわる迷信は簡単には消滅しなかった。18世紀末には、急進的な革命擁護派の中から、過去や旧体制に属する圧政者的存在としての死者像が喚起される。19世紀に入ると、暗く脅威を及ぼしうる死者のイメージを刷新する気運が高まり、人々は社会から死者を排除し、死体にまつわる迷信を払拭し、死者像を操作・美化すべく行動した。

第1章の後半は、本論に入り、フランス革命勃発以降の死者の扱いを、バーク (Edmund Burke)とペイン (Thomas Paine) の著作を比較する形で考察する。バーク が死者と生者の区別を回避し、自分たちの先祖の遺産を現代に生かすべきと考え たのに対し、ペインは Rights of Man で生者と死者を敵対的関係に置き、生者の権利を擁護した。ペインは、生まれながらにして権利を持つ自由な存在としての 人間像を提示した点で 19 世紀的観念を先取りしていたが、他方で、人々の死者 に対する愛着という 19 世紀になっても消滅しがたい感情的側面については考慮 が不足していた。

第2章 "Burial, Community, and the Domestic Affections in Wordsworth's *Lyrical Ballads*" は,第1章の後半で見た死者をめぐるコミュニティ論に対するワーズワス (William Wordsworth) の複雑な反応を,死者と生者が共存する様を描いた1790年代の詩作品を題材に精査する.ワーズワースが1790年代後半にはバーク的な思想を持っていたことは多くの研究者が認めてきたことで,著者も大筋では合意するが,よく吟味すると,これらの作品群には親バーク的な考えのみならず反バーク的な考えも見て取れる.ワーズワスは,バークと同様,国家の感情面に

おける死者の重要性を認め、死者が持つ感情的効果を改革に用いようとしたが、他方で、国家的な生者と死者の絆の形成方法についてはバークと考えを異にし、埋葬を世代間の絆を象徴するもの、また政治的・社会的ヒエラルキーに抵抗するものと捉えていた。ワーズワスはまた、土地が醸し出す雰囲気とそこに眠る死者には関連があることを詩で示し、'Michael'、'We Are Seven'、'The Brothers' などにおいて、墓地を、消えゆく牧歌的な田舎とすぐそこまで迫る近代的社会の違いを示す場所として機能させた。

第 3 章 "'The Feeling of the Living and the Rights of the Dead': Ethics and Emotions; Bodies and Burial: Godwin and Bentham"は、19世紀以降の生者と死者の関係を分 析する。19世紀に入ると、死者を進歩の障害と見なす人々が、死者のイメージ を変えようと模索し始め、その一環として、死体をめぐる従来の道徳観や感受性 の一新を試みた。19世紀の最初の40年間には、功利主義的・結果主義的思想が 改革の推進力となったが、埋葬や死体の処分は、根強いキリスト教的伝統に基づ く義務感により、依然として扱いにくい問題であった、本章では、特にベンサム (Jeremy Bentham) とゴドウィン (William Godwin) がどのように功利主義的・結果 主義的価値観を死体の扱いに応用しようとしたかを分析する。両者は、生者が死 者に対する義務感から行ってきた従来の埋葬や追悼はもはや不要であり、これら の慣習は生者にもたらす益によって決定されるべきと考えた点では同じであった が. 感情の扱いについては異なっていた. ベンサムは功利主義的な方策を考える 上で、人々の感情面を考慮に入れなかった。この姿勢の究極的な結果が、有名な 自己標本(オート・アイコン)である. 死者は痛みを感じないのであるから医学 研究を通して生者に役立てばよいと判断し、その際実際に解剖に携わる人々が持 つであろう複雑な感情を考慮することはなく、自分の死後、遺体を解剖し保存す るよう指示したのである。対照的にゴドウィンは、感情が人々にとって重要であ ることを見抜き、感情をも利用する形で、死体の扱い方を改革しようとした、結 局この死者に対する感情は、19世紀中期にますます重要性を増すことになる、

第4章 "Death in the Schoolroom: Associationist Education and Children's Poetry Books" では、親、教師、詩人、小説家、彫刻家、建築家、都市計画者等の大人たちが、それぞれの持ち場で、当時先進的だった「連想心理学・観念連合説」 (associationist psychology) を頼りに、子どもたちの持つ死や死者にまつわるイメージをコントロールしようとした様を考察する。具体的には、子どものいる空間において死を連想させるものを大人が管理することで、18世紀から引き継がれてきた死をめぐる恐怖や迷信を払拭しようとした。この死のイメージ改革運動において、ワーズワスの Lyrical Ballads に収められそれまであまり注目されることのなかった 'We Are Seven' が有効であるとされた。この詩の内容は、8歳の少

女が見知らぬ人から何度きょうだいの数を尋ねられても、教会墓地に眠る2人を数に入れ、自分たちは7人きょうだいだと答えるというものである。死者を生者であるかのごとく扱い、また墓地を怖いと思わない少女の姿勢は、子どもたちの手本になると期待され、この詩は19世紀を通じて子どもの読み物の定番となっていった。

本論の最終章となる第5章 "Better Thoughts of Death: Psychology, Sentimentalism and Garden-Cemetery Aesthetics in *The Old Curiosity Shop* は、『骨董屋』におけるネルと教会墓地の関係を取り上げ、本小説を作家ディケンズによる死者像改革の実践として分析する。ディケンズは、前章で見た改革者たちと同様、暗い死の文化を厭いそれを刷新したいと考えていた。ワーズワスの'We Are Seven'についても、死を絶滅ではなく分離として扱い死から恐怖を取り去る教育的効果を持つ作品として評価した。ディケンズは同時代の心理学にも馴染みがあり、文学には、精神発達を促す連想プロセスを通して、生者にとっての死者像を変容させる力があるという説に賛同していた。また私生活においても、1837年の義妹メアリ・ホガースの突然の死に衝撃を受けたり、誕生した自分の子どもたちに人間がいずれ死ぬという事実をどう伝えるべきかという問題に直面したりして、死について考えざるを得なかった。このような状況から生まれたのが『骨董屋』である。しばしばその感傷主義が批判されてきたが、本小説終盤で展開するネルが死について考える長い叙述は、ディケンズが死者像の美化を目指して意図的に創作したものである。『骨董屋』はいわばディケンズ版'We Are Seven'なのだ.

しかし『骨董屋』と 'We Are Seven'は、墓地をめぐる美意識や子どもの人物造形において、似てはいるが異なってもいる。まず墓地についてだが、『骨董屋』終盤でネルが過ごす村の教会墓地は、ワーズワス的な田舎の教会墓地の再現というよりは、1830 年代から 40 年代に建設された「庭園墓地」(garden cemetery)の美意識を体現したものである。都市の人口増加による埋葬場所の不足に伴い、1820 年代から 30 年代にかけて墓地改革運動が高まった。改革派は主に二種類あり、一つは従来の暗い墓地とは違う美しい公園風の共同墓地を郊外に建設しようとした人たち、もう一つはウォーカー (George Alfred Walker)やチャドウィック(Edwin Chadwick)ら公衆衛生の観点から改革を目指した人たちであった。前者は暗い墓地のイメージは精神に悪影響を与えるとし、明るく緑にあふれた庭園墓地の効用を説いたが、後者の衛生改革者たちも、心理学等の学問分野が独立細分化される以前の時代であったこともあり、昔ながらの墓地は、感染症を発生させるのみならず道徳的にも有害であると訴えた。結局 1831 年のコレラの流行も後押しをし、墓地改革は実行され、庭園墓地がロンドンをはじめとする都市の郊外に次々に建設され人気を集めた、庭園墓地の理念に賛同していたディケンズは、

1837年に義妹メアリ・ホガースが急逝すると, 1832年に開園して間もない有名なケンザル・グリーン (Kensal Green) に葬っている.

『骨董屋』が 'We Are Seven' と異なるもう一つの点は、子どもの登場人物の価値観の形成の順序である。ワーズワスの詩では、恐怖を伴わない死者のイメージは、田舎の小屋に住む少女が、彼女にきょうだいの数を尋ねた大人に教えるものである。しかし、18世紀末の田舎で生まれ育ったこの少女と違い、ネルは生者と調和するような死者像を最初から持っているわけではない。村に到着後、教会墓地に出入りし、古物研究をする独身男 (the bachelor) の死者の扱いを垣間見たり、教会管理人 (the sexton) と最近埋葬された死者について会話したりする中で、徐々に学ぶのである。そして墓地を自分の庭にしようと、規模は違えど、庭園墓地と同じ理念のもと、庭造りを始める。ネルが教会墓地で死を想いながら過ごす長い描写は、ネルの学びの過程なのだ。そして死について学んだネルは、自分が死ぬ時には、「光を愛し空の下にあったもの」すなわち植物などをそばに置いてほしいと頼む。こうして庭との繋がりを維持することで、ネルは生者と死者の連続性を肯定する。

庭園墓地と『骨董屋』は根本的に同じ理念から建設・創作されたため、その結果として似たような批判と称賛を受けることになった。両者とも、死の持つ現実を無視して死を美化していると批判される一方、死から暗く恐ろしいイメージを拭い去りたいという当時強まりつつあった人々の嗜好に合ったために、大人気となったのである。

以上,本書の内容を『骨董屋』を扱う第5章を中心に紹介した。本書の議論によって、評者は『骨董屋』にネルが死をめぐって考えたり行動したりする長い描写があるのはなぜかを初めて理解できた。それはディケンズが読者に、生者と調和する死者という新しいイメージを教えるために必要だったのだ。そして評者の『骨董屋』観を決定的に変えたのは、ネルが受動的な空白のような人物ではなく、死について情報を集め、考えを発展させ、庭造りを通じて自分の埋葬地を整え、死の床を演出するほどの主体性や積極性を持っていたという認識である。



サラ・ワイズ

『塗りつぶされた町 ── ヴィクトリア朝英国の スラムに生きる』

Sarah WISE,

The Blackest Streets: The Life and Death of a Victorian Slum

(464 頁, 紀伊国屋書店, 2018 年 7 月 18 日, 2916 円, ISBN-10: 4314011610)

(評) 小西千鶴

Chitsuru Konishi

19世紀末ロンドンを震撼させた大事件があった。イースト・ロンドンのホワイトチャペル地区で売春婦たちがバラバラに切り裂かれた、世にいう「切り裂きジャック」殺人事件である。被害者たちは鋭利な刃物で喉を掻き切られ、特定の臓器が摘出されるといった惨い猟奇的な仕打ちを受けていた。何故売春婦たちがこのような無残な扱いを受けたのだろうか。本書の舞台はこのホワイトチャペル地区から北東に向かって徒歩10分ほどの距離にある。ここの住民たちも同じ頃世間から疎まれて差別と好奇の目で見られていた。なぜならここは極貧の街ニコルだからだ。ここには当時5700人ほどが住んでいてその8割を子どもが占めていた。死亡率は他の地区より2倍も高かった。本書はこの極貧街ニコルの誕生から終焉に至るまでを編纂した社会史である。貧困はどうして生まれるのだろうか。著者ワイズは答えてくれる、自然に生まれるのではない、私たちが作り出してしまうのだと。強い欲が蔓延り弱い者を犠牲にしてゆく。気づいたときにはもう手遅れだ、ワイズによって掘り起こされたヴィクトリア期の悲惨を紹介したい。

スラムはいかにして誕生したのだろうか. 第1部では、ニコルの歴史が17世紀に遡って紹介されている. 当初この辺りの土地はロンドン中心部の商人や弁護士が購入し、その頃までは住人の用途に応じた住居が建設されていた. ところが、17世紀末になると投機目的の新たな住宅が建ち並び、四方を建物に囲まれた中庭が次々に現われて、そこに地元の業者たちが挙って法律違反の住宅を建てた.これが暗い歴史の発端である. さらには安価な住宅建材に粗悪工事が重なって、数々の劣悪な住居が建設された. ニコルの街は1836年から約50年で、違法建築物に狭い作業場、そして家畜小屋などがひしめく異様な様相となってスラムと化

したのであった。そんな街の光景が1887年にニコルを訪問した二人の紳士をとおして語られている。そこは入り組んだ地理から犯罪の温床ともなっていて、紳士たちが見渡す限り住宅はかなり老朽化している。手が入れられた形跡はまったく見受けられない。家主たちは危険を承知で、頻りに「すし詰め状態」にすることから大きな利益を得ていたのである。

その悪臭と汚らしさは人間が住めるような状態ではなかった。ワイズは、19世紀半ばから約40年間にわたって議会を通った住宅法案や住宅法令改正案、そして住宅法の見直しなど、数々の資料と向き合い細かい分析を行った。そして、それらがどれも貧困者の住宅改善にはつながらなかったことを確認している。その主な原因は「教区」と「不動産オーナー」に共通してあった吝嗇ぶりだ。教区は、納税者の負担が増えるとありきたりな言い訳をすることで修繕費を惜しんだ。ここの教区行政を担っていたのは、教区内には居住していない事業を営んでいただけの選ばれた数人の小売店主たちであった。厳密に言うとよそ者である。劣悪な住居の問題も他人事であろう。ワイズの批判も厳しい。しかし、誰も教区を強制的に動かすことなどできなかった、地域のことは地域の人たちに任せておくほうがいいし介入することは難しいというわけだった。一方の不動産のオーナーたちについては興味深い。ディケンズの『リトル・ドリット』に登場する一見温厚な家主キャスビーと取り立ての厳しいパンクス、そして借家人たちの関係のように、ニコルの借家人たちが知っていたのは情け容赦のない集金人やその代理人だけで、大家は隠れた存在であり責められることもなかったのである。

第2部ではニコルに生まれてその生涯をニコルで過ごした、いわゆるスラムの証言者ともいえる一人の老人アーサー・ハーディングの録音された回顧録をもとに、街での生活や人々の内情が詳しく語られる。彼の家は、小さな家をぎゅうぎゅう詰めにしたバラックのような建物のなかの一室で、ニコルでは状態のいい方に入ったという広さ7畳ほどの一部屋に家族6人が暮らしていた。いつも誰もがお腹を空かしていて、通りの露店商から食べ物を盗み持ち帰ると家族からは英雄扱いされた。成長とともに彼の盗品は食べ物から商品へと変わり、スリを働き、果ては暴力を振るうといった犯罪行為に手を染めていった。そこに住んでいるというだけで、まともな仕事には先ず就けなかったからだ。

身内以外で助けてくれるのは救貧院だ.しかし、ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』で周知されたように 1834 年の新救貧法は、貧民のための教区の救済策をできるだけ受け入れにくいものにするように作られていた.ハーディングー家も家族離散の条件が付与されて結局頼ることは無かったし、一度に 100 人もの救済申請を撥ねつけることもこの居住地域の救貧委員会は実施していた.さらには、院外給付も大幅な削減が行われていたため、人々の不満がデモに発展する.

すると、この動きが個人の慈善活動に火を付けた。数々の慈善団体が発足され、ニコルも一時慈善の精神であふれかえったという。15~20の団体が発足されたというのだから、施しの恩恵を受けた人々も多くいたことだろう。しかしながら、彼らの良心的な慈善活動もその場しのぎの救済で終わってしまった。

ワイズは、その理由の一つに慈善を施す側と施される側の大きなギャップを指摘している。与える側は、自分は人の役に立っていると自負を強め、中流階級の窮屈な生活からの解放が実感できたであろうが、受ける側にも自尊心がある。それにうるさい質問に答えて暮らし向きのことを話さなければならなかった。施しを受けるのも無条件ではなかったのである。住居の過密状態によって起こる家庭内暴力、近親相姦、育児放棄や児童虐待など、ニコルの家庭が抱える問題はじつに多様で複雑だ。そんな個人情報の公開を進んでする住民はなかなかいなかったであろう。

慣習的な救済方法とは異なり、第3部ではニコルの問題に取り組んだ人々と彼らのユニークな解決策が紹介されている。先ずは、二人のアナーキスト、フランク・キッツとチャールズ・モウブレーのものだ。彼らは共に貧しさを十分に体験していたことからも、貧困を撲滅させることができると確信しニコルへ移り住んだ。「革命」が必要だと考えた彼らは、極貧の人々の意識を呼び覚ますために精力的に政治ビラを作成し配布した、それに通行人の注意を引きつけるため街頭演説も行った。日雇いの港湾労働者たちにはストライキを呼びかけ、労働への賃金値上げと重労働反対の声を上げた。さらには、家賃の滞納によって言い渡される強制退去や差し押さえに対抗するための組織も立ち上げた。ちょうど、そのころロンドンでは、長引く不景気、高い失業率から労働者たちによるデモが盛んに行われていたこともあって彼らの活動も発展を見せた。しかし、繰り返される労働者たちのデモに警察の取り締まりもいっそう厳しくなるばかりで、次第にアナーキズムも「頭のおかしな連中」などの汚名が付いてまわるようになった。そんな経緯もあってか、彼らの熱い革命精神は、忍耐強いニコルの住民たちには届かなかった。

ニコルの貧しい労働者たちが連帯して声を上げるきっかけとなったのは、教区による路上営業の取り締まりだった。もともと教区委員たちは小売店主や商人で構成されていたので、安物を売る露店商や行商人を追い出そうとする彼らの陰謀だとニコルの人々は捉えたのである。ロンドンの人々もニコルの露店商を支援するため請願書には1万人が署名し小売店主層を非難した。その他にも、ニコルの住民たちを憤らせた政策があった。子どもの予防接種と通学の義務化である。もともと生後三か月未満の乳児に天然痘の予防接種を受けさせることが義務化されていたが、それを拒んだ親には重い罰金が断る度に課せられることになったのだ。

彼らは定期的に集会を開き予防接種を反対するデモを行った。なにしろ予防接種の実施は救貧委員会の仕事であったため、彼らにとってはその効果も曖昧な予防接種も新救貧法と同様に、支援や配慮に見せかけた貧乏人いじめだと疑ったのである。住民に教育を施す政策も、彼らにとっては迷惑な話だった。学校へ行ったところで、子供たちに待ち受けていたのは体罰や宿題の押し付け、何よりも長い時間拘束されることで家計を助けることができなくなってしまうのであった。住民の事情はまったく理解しないで推し進めるやり方は先述の自己満足の慈善と似ている。

ニコルの人々による抗議デモは世論や報道機関から多くの同情を集め、以外な 人物からの支持が寄せられた。海運業経営者のチャールズ・ブースが貧困の真の 原因と規模を突き止めようと動き出したのである。彼は、調査チームを結成し1 軒1軒を訪問した。そんな彼の努力と活動を結実させた社会調査報告書が全17 巻からなる『ロンドン民衆の生活と労働』である。ブースは、調査員が作成した ノートをもとに、独自の社会的階層区分を考案しイースト・エンドの住人90万 9 千人を最下層階級 A から上位中産階級 H までの 8 つのカテゴリーに分類した。 ブースは人が貧困の状態に陥る要因として3点あげている。先ずは、働き口が少 ない、賃金が低いといった雇用の問題、次に無駄遣いや飲酒による習慣の問題。 そして病気、けが、高齢、大家族といった境遇の問題である。さらには、それら の割合を換算して8つの階級ごとに首都の街路を色分けした貧困地図を作成した. 黒く塗りつぶされた街路には、階級 A に相当する最下層の労働者、浮浪者、準 犯罪者らが密集して住んでいる. ニコルには. 黒の不名誉なインクが塗られた. ブースは解決策として、精神的特性は身体的特性と同様に遺伝するという当時の 考え方に基づき、政府が家庭生活に介入し子どもたちを両親の影響から引き離す べきであると主張した。加えて、極貧階級の存在そのものを国は規制するべきで、 彼らを作業施設に住まわせるという労働者コロニーの設立を推奨した。ブースの 考えに賛同する人々は多くいたし、メディアも大きく取り上げた、しかし、ワイ ズは冷ややかである。ブースの労作を称替しながらも、結局のところ、その解決 策は彼らを強制的に収容施設に住まわせるということに他ならない、彼らが自分 たちの居場所を失くすことは彼らを絶滅させるといったことにつながる危険なア イデアだと述べている。そもそもニコルを黒く塗りつぶしたこと自体にそんな意 識が潜んでいるようである.

ブースと同様に、一匹オオカミで多くの敵を作りながらも斬新なアイデアでニコルの貧困に取り組んだ人物がいる。スラムの牧師と呼ばれたファーザー・ジェイである。ジェイ牧師は、地元の住民が「小さな地獄」と呼ぶニコル界隈のオレンジ・コートに新たな教会を建設した。彼は、住民たちが自分たちも神の恵みに

与る資格があると感じるような教会を提供すべく、豪華で壮麗な建築物に拘った.教会は、2階に絢爛な聖堂が設けられ、1階と地下はメンズクラブと体育室が開設された。ニコルに住む18歳以上の男子は、週1ペニーの会費で入会できたし、ボクシング・リングのある体育室は一番の人気だった。クラブには規則が殆どなく禁止されていたのは、飲酒、かけ事、罵り言葉などだった。彼は、ニコルの最質層の特に青年男子を熱心に指導した。前科者も多く、殆どが失業中か臨時雇いの仕事をしていて、彼が解決策として勧めていたのは、軍隊に入るか、海外移住だった。しかし、ワイズによると、彼はいくつもの顔を持っていたと言う。教区民が貧困にあえいでいる原因やその解決策に関して、彼の見解には一致が見られなかったからだ。後にジェイ牧師は「優生学」にとりつかれ、貧しい者が犯罪に走るかどうかは「遺伝的汚れ」であると考えるようになった。したがって、ジェイ牧師も「強制収容措置」の必要性を訴えた。ただし、ジェイ牧師やブースの策は英国内で実施されることはなかった。

第4部では、ロンドンの行政改革に焦点が充てられる、問題の解決に向けた個 人の斬新なアイデアは運よく実を結ばなかったが、この行政改革は実行された. ロンドンでは、1888年にロンドン州議会が誕生すると、ニコルにおいて大規模 な撤去・更地化事業のプロジェクト「バウンダリー・ストリート計画 | が立ち上 げられた、ここでは章のタイトル「交錯する思い」が示すように、立ち退きから 完成に至るまでのロンドン州議会と教区や家主たち、そしてニコルの住人たちと の一筋縄ではいかない数々のやりとりが詳しく綴られてゆく. さらには、プロ ジェクトの進行とともにニコルの住民に向けられた周囲の偏見も浮き彫りとなる。 そんな過程を経て、ニコルの街が新たに生まれ変わったのは 1896 年のことだっ た、ワイズの評価は、貧しい人たちに家を提供するという点で、バウンダリー・ ストリート計画は勇気ある壮大な実験だった。しかし、地元住民の生活を改善す るという点からすれば大失敗だったと辛辣だ。というのも、ニコルから立ち退か された 5719 人のうち新しい住宅団地に入居できたのはたった 11 人であったから だ、家賃は高かったし、作業場や露店商など彼らの生活実態に合わせた住居を提 供してはいなかった。これまでと同じ暮らし方が出来なくなってしまったことや。 規制や規則で縛られるのも彼らにとっては想定外のことであったにちがいない。 彼らはプロジェクトから身を引いたということだった.ここにも住民たちの事情 を理解していない状況が見受けられるが、じつは考慮するつもりなど、最初から なかったのかもしれない.

以上が本書の概要である. 膨大な数に亘る資料を掘り起こし、それらを綿密に調べ上げてゆくワイズの労作をガーディアン紙は 2008 年 7 月 5 日のレビューで "Wise misses nothing." と高い評価で称えた. そんな本書の訳者の労力も相当なも

のであっただろう。ワイズの炯眼によって再現されたニコルの貧困問題は悪因悪果の教訓である。そのことは富める者は益々富み、貧しい者は益々貧しくなるといった現代社会が抱える格差の問題を彷彿とさせる。私たちの今への警告と問いかけがたくさん織り込まれた作品である。



Peter Cook.

The Romantic Legacy of Charles Dickens
(xiii+276 頁,Basingstoke: Palgrave Macmillan,
2018 年,本体価格 £59.99)
ISBN: 9783319967905

(評) 木村晶子 Akiko KIMURA

ディケンズ文学の根底にロマン主義的なものがあることはこれまで指摘されて きたが、ロマン派文学とディケンズを結びつけた論考はそれほど多くない、ディ ケンズの想像力に焦点を当ててワーズワースらの影響を考察した Garrett Stewart の Dickens and the Trials of Imagination (1974), ヴィクトリア朝作家におけるロマ ン主義の影響を分析し、ディケンズにも一章を割いている David Stone の The Romantic Impulse in Victorian Fiction (1980) などが有名だろう. Stone はディケン ズの文学をリアリズムとロマン主義の混合だと語るが、ディケンズが本質的にロ マン主義者だったこと、それによって彼が時代を超えた文学者になったことに納 得できるのが本書である。本書は、アングリア・ラスキン大学のシニア・レク チャラーでブロンテ姉妹の評論家としても名高い著者が同大学に2017年に提出 した博士論文をもとにしており、アフリカや中東の他、英国内でも多様な教育経 験があるという経歴のためか、わかりやすく整理した形で議論が展開されている。 ワーズワースのみならず、ブレイク、コールリッジ、シェリー、キーツといった ロマン派を代表する詩人の影響の他、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイ ン』との類似性についても多くの紙幅を割いている点が目新しい。 ディケンズの 小説に通底する根本的な問題意識はロマン主義文学から継承したものであり、そ れらが〈ディケンズ的ロマン主義〉(Dickensian Romanticism) として独自に発展 したのがディケンズ文学の真髄だと著者は主張している.

本書は五章構成で、第一章のロマン派文学の歴史的文脈の概観や本論の先行研究との相違点の説明に続き、第二章以降は子供時代、時間、進歩、アウトサイダーの四項目をロマン派の継承者としてのディケンズのテーマとして章題に掲げている。各章で章題に関するロマン派文学の解説、ディケンズの二つの長篇の作品論の形で、そのテーマの継承と発展が論じられている。以下、各章の概要をまとめてゆく。

第一章では、ディケンズの文学者としての経歴が始まった 1830 年代は、英国社会を覆っていた仏革命の影響に対する恐怖が収まっていたとはいえ、激変する社会への不安があったことが述べられている。 18 世紀末から 19 世紀初頭のロマン派の政治的・文学的急進性は、(バイロンを例外として) 多くの読者の共感を得たとは言えなかったが、ディケンズは社会の支配的イデオロギーに対するロマン派の批判を受け継ぎつつも、常に読者に直接語りかけ、読者の共感を得る文学を形成していった。ディケンズ文学のメロドラマ的大衆性を強調してロマン派のエリート主義とは無縁だとした Juliet John に反論しつつ、ロマン派文学の真髄を共有していたからこそ、ディケンズは時代を超えた偉大な文学者となったと著者は語る。

第二章の「子供時代」は、先行研究で指摘されてきたディケンズとロマン派の 関連を示すテーマだろう。例えば、Peter Coveney は 1950 年代からディケンズ文 学におけるロマン派的子供像を考察しており、本書でも彼の論考が引用されてい る. 本書ではまず. 19世紀初頭の子供の健康や教育に対する関心の高まりの中 で、社会によって汚されていない子供生来の善良さを信頼する思想が形成された 経緯が、コールリッジを中心に語られる、現在では当然のように思えるロマン派 的子供観は、当時は非常に珍しく、子供は堕落したアダムの子孫として大人が矯 正すべき存在だった。子供観の大きな転換はロマン派の功績であり、ディケンズ はまさにその継承者である. さらに著者は. コールリッジの影響を受けたメア リ・シェリーが成長過程における愛情や教育の重要性を表現した作品として『フ ランケンシュタイン』を捉え、ディケンズはこのテーマを発展させたと述べる、 オリヴァー、デヴィッド・コパーフィールド、ピップなど、ディケンズの作品に おける子供時代の重要性は言うまでもないが、本章では『デヴィッド・コパー フィールド』と『大いなる遺産』において、ロマン派を継承した子供観が重要な イメージを決定づけていることが分析されている。特に『大いなる遺産』は、 ディケンズにとって自らの記憶と想像力によって紡がれたワーズワースの『序 曲』に相当する作品だと述べられている。

第三章「時間」では、産業革命の副産物として 1790 年から 1810 年の間に時計が生活のさまざまな場面に登場し、〈機械的に計られる時間〉が新たに人々を拘束するようになったこと、この機械的時間がロックやベンサムらの功利主義と深く関わり、その対極にある思想がロマン派詩人の人道主義だったことが解説される。後者を受け継いだディケンズにとって、機械的時間はヴィクトリア朝の社会悪と同義だった.霊によって過去、現在、未来を経験する『クリスマス・キャロル』のスクルージの機械的時間からの解放は、キーツの重要なテーマであり、時間の停止はコールリッジの『老水夫行』のテーマでもあった.

『ドンビー父子』では、功利主義的時間に支配されていたドンビー氏が、最終的にフローレンスやウォルターのロマン派的人道主義と愛によって救われる。『互いの友』では、功利主義的価値観を表わす人物として、ヒロインのリジーに恋をして身を滅ぼす教師ブラッドレイ・ヘッドストーンに焦点が当てられる。彼の抑えきれない嫉妬や憎悪は、ディケンズ自身が抑えようとしていた激しい情念の投影でもあり、疎外され、愛を得られず、殺人すら犯そうとするヘッドストーンの姿はフランケンシュタインの怪物にも通じる。『ドンビー父子』では海、『互いの友』では川による水のイメージが、作品全体を有機的に統合していると考察されている。

第四章「進歩」では、ロマン主義文学は革命と言うよりむしろ、産業革命による変化に対する反動だと主張される。都市化、工業化による人間の精神の衰退についてブレイクは警告し、ワーズワースも自然のサイクルから逸脱した工業化社会を批判した。そうした中で逆説的とも言えるのが、コールリッジが工業化の源となるテクノロジーや科学に魅せられていた点である。彼にとって科学は人間存在の根源を明らかにする可能性をもっており、彼もワーズワースも化学者ハンフリー・デイヴィーと親交があって、シェリー夫妻もデイヴィーの研究を学んでいた。メアリは先端的科学に興味をもっていたものの、思いやりを伴わない科学の進歩は悲劇的結果しかもたらさないことを『フランケンシュタイン』で表現した。人類が経験したことのない工業化を一早く成し遂げた英国において、科学やテクノロジーの影響に関する議論は、ディケンズの生涯にわたって続いていた。

『荒涼館』以降、イメージが有機的に作品の構造とテーマを統一するロマン主義的特色が顕著になる。自然環境を大切にし、思いやりある人間関係を築いてこそ進歩は達成され、さもなければ前史的混沌に陥るというロマン主義的思想が、『荒涼館』の根源にもある。ここでは、汚染された霧のように、貴族階級と法制度が人間本来の進歩を阻んでいる。主要人物の抱える問題が、マイナーな人物を通しても表現される点が円熟期のディケンズの特色だが、目の前の現実の重要性を認識できないことが、数々の人物たちによって示されている。『荒涼館』初版の序文の「おなじみの物事のロマンティックな側面」に焦点を当てたというディケンズの言葉は、彼の文学全体の真髄だが、それに続く「この本ほど多くの読者に恵まれたことはない」ということばにも注目すべきであり、読者がロマン主義的価値観を望んでいるという認識こそが彼の人気の秘密だったと論じられる。

続いて考察されるのは、『荒涼館』の翌年に執筆された『ハード・タイムズ』である。イメージによって統合される有機的構造が『ドンビー父子』から顕著になり、『荒涼館』がその手法による長い散文詩と言えるのに対して、『ハード・タイムズ』は作者が語り手として介入する教訓物語になっており、主な人物が中産

階級以上だった『荒涼館』に比べ、労働者階級を中心にした点も注目に値する. 事実ばかりを重視する父の価値観に対抗するルイザとトムは、情緒と想像力をどう育むかを表現しており、スティーヴンは功利主義文化の影響を示す人物としてワーズワース的価値観を思い出させる。ディケンズが『荒涼館』における芸術的完成度に満足せず、科学的進歩と対峙させる形で、19世紀半ばの現実においてなお有効な人間本来の目指すべき進歩をより直截に示したのが『ハード・タイムズ』である。1850年代初期のまったく異なる形式のこの二作品は、共に人類の進化の歴史を見据えつつ、ヴィクトリア中期の社会におけるロマン主義の有効性を論じたと考察されている。

第五章「アウトサイダー」では、ロマン派文学における罪と罰、疎外の問題が検証された後、ディケンズにとってもこれらの問題が重要であったことが『骨董屋』と『リトル・ドリット』を通して論じられる。ワーズワースは何の罪も犯していなくても故郷を失う「女放浪者」のような孤独な弱者に焦点を当て、ブレイクは「ロンドン」において権力と対極に暴力や苦悩があることを明らかにした。コールリッジの『老水夫行』や「真夜中の霜」では人間存在と自然環境の相互依存が深く追求されており、『フランケンシュタイン』の核心にも、そうした生物学的現実への関心が見てとれる。こうした認識を受け継ぎ、社会構造のダイナミズムに関する読者の意識を高めることがディケンズのロマン主義的遺産の本質だと著者は主張する。

『骨董屋』では、ワーズワースの女放浪者やフランケンシュタインの怪物のように、何の罪も犯していないネルが悲劇的運命をたどる。無垢なロマンティック・チャイルドであるネルをワーズワース的自然から現代的な都市の文脈に移し、彼女の体現する価値観が通用するかを探求したと考えられる。広い意味でのキリスト教道徳的結末を迎えるとはいえ、この作品は存在の根源を覆う疎外という影に覆われており、ロマン派文学における人間とその環境の関係性への問いが新たに提示されている。人間性を回復する自然の力に対するコールリッジの全面的信頼とは異なり、自然の力のみではネルの純粋無垢な本質を救えないことをディケンズは表現している。

『リトル・ドリット』のウィリアムは孤立と疎外のテーマの探求を最もよく表す人物だが、この作品のほとんどの人物が愛に基づく関係を失ったアウトサイダーである。商業的文化においてロマン主義的価値観が受容されることはなく、コールリッジにとって「偉大なるすべての師」だった自然は、物質文明の破壊的力を止めることはできない。だが、人間を救う自然の力を否定的に見る『骨董屋』と違って、『リトル・ドリット』では自然界と結びつく純粋無垢な高潔さが個人的レベルにおいて保たれ、特に非利己的な女性の力によって人間性が回復さ

れる. エイミーとアーサーは社会から疎外され続けるとはいえ, 愛に満ちた私生活を築くことができる. 自然は万能薬にならないにしても, 限定された個人的なレベルでの癒しを与えてくれるのだ.

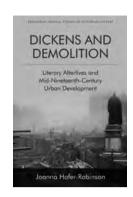
結論では、社会変革の必要性、文学者こそがその変化をもたらす存在だという意識がロマン派とディケンズの共通点であり、ロマン派が詩に散文的要素を組み込もうとしたとすれば、ディケンズは詩的想像力を小説の重要な要素としたこと、ロマン派の社会批判が一般社会から遊離した単一的視点からだったのに対し、ディケンズは物語作者の社会的役割を自覚し、社会全体を包含する多面的ヴィジョンを構築したことが述べられる。愛情ではなく金銭価値による人間関係が人間を退歩させるという認識、エコロジーへと発展する自然の重要性もロマン派と共通するが、自然への信頼が暫定的でしかない点がディケンズ的ロマン主義の特質である。矛盾に満ちた社会を救うのは、少数の善良な個人でしかないのだ。最後には、ボルへスがディケンズを愛読していたこと、マルケスのマジック・リアリズムがディケンズ文学に通じることが述べられ、二人の著名な南米作家に対するディケンズのロマン主義的特質の影響の大きさにまで言及されている。

以上見てきたように、本書では、産業革命以降の工業化・都市化に対するアンチテーゼとしてのロマン主義思想が、これまで指摘されてきたよりはるかに深くディケンズの文学に継承され、内面化され、独自の形で発展してきたかが丁寧にたどられている。ディケンズの8編の長編小説の分析を通して示されるロマン主義的主題は、明確な論点をもった細やかな先行研究への言及によって説得力がある

ただ、意図的戦略かもしれないが、ロマン派詩人それぞれの個別性が無視される形で、産業革命が進行する社会変化への反動という一面が拡大されることに違和感ももった。ロマン主義と言っても、ロマン派文学という範疇自体が彼らの活躍した時代にはなかったし、言うまでもなく第一世代のワーズワースやコールリッジと第二世代のシェリーやキーツとの違いは大きい。第二世代に関しては言及も少なく、シェリーの政治的急進性やキーツ独特の美意識や死生観も十分解説されることはない。明快な議論展開のために単純化は避けられなかったかもしれないが、各詩人のごく一部のみを切り取っている印象があった。『フランケンシュタイン』との共通点の考察は非常に示唆に富んでいるが、メアリ・シェリー独自の科学批判と他のロマン派の科学の受容との違いについても、さらに議論がほしいと感じた。また、科学とテクノロジーが一括りにされており、近年、学際的研究が進んでいるロマン派と科学の深い関わりも単純化され過ぎているように思った。

評者としては、著者が指摘するロマン主義的本質に納得すればする程、ヴィク

トリア朝的倫理と自助精神を体現する第一人者でもあったディケンズの葛藤はなかったのかが気にかかった。紛れもなくヴィクトリアンであった彼の〈ディケンズ的ロマン主義〉において、ロマン派の〈崇高さ〉は失われていたはずであり、そのことが自然観の変化にも影響したのではないだろうかと疑問ももった。とはいえ、ディケンズ文学批評における新たな視座を提供した貴重な成果であることは間違いなく、作家の全体像に貴重な光を当てた評論である。



Joanna HOFER-ROBINSON.

Dickens and Demolition: Literary Afterlives and Mid-nineteenth Century Urban Development

(248 頁,Edinburgh: Edinburgh UP, 2018 年 8 月 31 日,本体価格£75. 00)

ISBN: 978-1-4744-2098-3

(評) 小宮彩加 Ayaka KOMIYA

この夏、ロンドンに行ったときに、『オリヴァー・トゥイスト』のフェイギンの隠れ家のあったサフロン・ヒルを訪れてみた。道の細さに当時の面影が残っているようにも感じたが、もちろん今ではスラム街ではない。どことなく殺風景な印象を受けたのは、ここがヴィクトリア朝後半にスラム・クリアランスが行われ、過去と切り離されて、すっかり生まれ変わった小路だったからだろう。フェイギンやビル・サイクスが悪事を企んでいたパブ「スリー・クリップルズ」のモデルであったというパブにも入ってみたが、やはりフェイギンのような輩は見当たらなかった。

サフロン・ヒルを訪れる者の中には、私のようにディケンズの世界を求めてやってくる者もいるだろう。このようにディケンズの作品の面影は、ヴィクトリア朝時代だけでなく、現代に至るまで時を超えてロンドンの随所で感じられ続けている。これを Dickens and Demolition の著者 Joanna Hofer-Robinson は 'Afterlives' というキーワードで表している。「来世」とか「死語の世界」という意味の語だが、著者もその時々でニュアンスの違う使い方をしているので、ここでも英語のまま使うこととする。ディケンズが亡くなって以降、現代に至るまで、ロンドンについて語られるときにディケンズ作品から引用が用いられることが多い、本書はそういった言説の中でディケンズがどのように利用され、'Afterlives'を与えられてきたのかを丁寧に考察した研究書である。

ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』は雑誌『ベントレーズ・ミセラニー』に連載されたが、この雑誌の読者層はまさにロンドンの都市改革を率いていた教養ある中産階級の男性たちだった。さらに、ディケンズは、作品中でおぞましいスラム街の生活をリアリスティックに描写するときにも、砂糖でコーティングしたかのように、読者に不快感を与えない書き方をしていたため、政治家や

慈善家も積極的にディケンズを引用できたのである。それを著者は、議会の議事録や地方新聞、ロンドンの各地区の図書館やアーカイブなども利用し、とにかく目もくらむほど膨大な量の資料を用いて分析している。これだけ圧倒的な量の資料を見事に整理し、読者にわかりやすいように提示している著者の手腕には脱帽である。

第1章 "Charles Dickens and Metropolitan Improvements"では、ディケンズが作家として活動を始めた1830年代から、Metropolitan Board of Works (MBW)が創設された1855年までの間を取り上げている。当時はレッセフェールの時代で、慈善家や地方の自治体などがそれぞれ違う立場から個別に都市の近代化に関わっており、結果として統制の取れていないチグハグなロンドンができあがってしまった。たとえば、ファリンドン・ストリートのあたりは、1830年代に周辺のスラム街が一掃されたが、取り壊し後30年以上経っても工事が遅々として進まず、一帯はファリンドン廃墟 (Farringdon Waste)と呼ばれていたそうだ。1858年にウォルター・バジョットがディケンズについて、「後世のための新聞特派員のようにロンドンを描く」と言ったことは有名だが、その後に「すべてがそこにあるが、すべてがバラバラである。(中略)ディケンズはそれらを繋ぎあわせようとはしない」と書いている。特派員のようにロンドンを描写するというのはよく分かるのだが、その後の部分は分かるような分からないような気がしていた。著者がいうには、これはヴィクトリア朝前半の分裂し、取り留めのない状態のロンドンの姿を反映しているのだそうで、なるほどと納得した。

第2章は、演劇として舞台で上演された『オリヴァー・トゥイスト』について書かれている。『オリヴァー・トゥイスト』の劇は大変な人気であり、まだ連載が続いている最中から、ロンドンのあちこちの劇場で上演されていたそうだ。脚本は劇場によって勝手に変更が加えられていて、著者は様々な劇場の『オリヴァー・トゥイスト』の脚本やプレイビルをもとに各劇場の特徴を論じている。「取り壊し (Demolition)」のテーマとは直接は関係のない内容のようにも感じたが、オリヴァーやドジャーが歩き回り、フェイギンのアジトもあったサフラン・ヒルの至近にあるサドラーズ・ウェルズ劇場について書かれた節は読み応えがあった。

第3章は、"Afterlives and the Demolition of Field Lane"は、本書のエッセンスが 凝縮された章である。フィールド・レインが『オリヴァー・トゥイスト』の中で どのように描かれているかを明かにした上で、フィールド・レインのスラム街が 段階的に取り壊された 1840 年代、50 年代、60 年代、70 年代の取り壊しに関す る当時の言説の中に『オリヴァー・トゥイスト』からの引用がどのように使われ ていたかを丁寧に論じている。『オリヴァー・トゥイスト』を根拠に、そこには 極悪非道な犯罪者たちや外国人コミュニティが存在すると主張し、フィールド・レイン一帯のスラム街取り壊しは進められたのだが、おもしろいことに、フィールド・レインが姿を消してからは反対にディケンズの作品を通してフィールド・レインは人々の記憶に存在し続け、まさに "Afterlife" を得たかのようになっているのだ。

第4章は、ディケンズ自身が関わった都市改良の慈善活動について書かれている。ディケンズが資産家のアンジェラ・バーデット・クゥッツに政治家を紹介したり、労働者向けの集合住宅建設についての相談にのるなどして、ベスナル・グリーンのコロンビア・スクエアは建てられた。ちょうど同じ1850年代の作品の『荒涼館』や『リトル・ドリット』に描かれる、くだらないお役所仕事は、一連の慈善事業を通してディケンズが感じたものだろうと著者は述べている。

第5章は、ジェイコブズ・アイランドを中心にディケンズと衛生改革との関わりを書いている。ジェイコブス・アイランドは、『オリヴァー・トゥイスト』でロンドン中で「もっとも汚く、奇妙で、もっとも風変わりな場所」と描写されたことで一躍名が知られるようになり、1850年代の都市衛生改革に関する議論の中でも中心的に取り上げられた場所である。ロンドンの不衛生なスラム街が伝染病の発生源になっているという主張の中でディケンズ作品が用いられ、衛生改革が進められたのだった。都市衛生協会 (MSA)の一員として衛生改革に積極的に関わっていたディケンズ自身も、自作からしばしば引用をしつつ改革の必要性を論じていたそうだ。ジェイコブズ・アイランドについても、フィールド・レインと同様で、1920年代にはすっかり姿を消していたものの、ディケンズ作品を通して存在し続けている。今ではその跡地にブループラークが掲げられているとのことである

ロンドンは常に変化し続けているが、ヴィクトリア朝時代は特に積極的な取り壊しが行われた時代だった。ディケンズの作品はそういった変化を加速させたが、その一方で、彼の作品を通してディケンズの時代のロンドンは人々に忘れられることなく、生き続けているのだ。本書では『オリヴァー・トゥイスト』を中心に論じられていたが、『荒涼館』や『リトル・ドリット』など他の作品のロンドンの描写についても同様に研究できるだろう。あるいは続編をもう執筆しているのかもしれない、今後にも期待したいと思う。



DICKENS, NICHOLAS NICKLEBY, AND THE DANCE OF DEATH



Jeremy TAMBLING,

Charles Dickens, Nicholas Nickleby,

and the Dance of Death

(viii+174 頁, New York: Routledge, 2019 年,

本体価格 \$ 140.00)

ISBN: 9780367143084

(評) 猪熊恵子 Keiko INOKUMA

1839年10月, Examiner 誌に Nicholas Nickleby の書評を寄せた John Forster は、作品の出来栄えを高く評価しながらも、Henry Fielding の Tom Jones と比較して「プロットの構成」面から後者に軍配を上げている。曰く、「『トム・ジョーンズ』では最初から最後まで、本筋の物語と関係のない出来事は一つたりとも起こらない」のに対して、『ニクルビー』のほうは「計画性の欠如および見取り図の不在が冒頭から明らかである」と (Forster 677). 皮肉なことに『ニクルビー』における統一的な「フォーム」の不在を難じたフォースターによる書評は、その後の批評にある種の「フォーム」を与えたのかもしれない。『ニクルビー』(のみならずディケンズ前期作品の多く)は、後期作品と比較して、一貫性や計画性の欠如を繰り返し問題視されてきた。結果として前期作品の多くは、Jeremy Tambling が本書冒頭で簡潔にまとめる通り、一般読者の間では高い人気を博しながらも、批評の俎上にあがる機会に乏しかったのである (2).

それでは本書は、『ニクルビー』における「フォーム」の不在について、どのようなアプローチをとるのだろうか、タンブリングはフォースターと同じく『ニクルビー』の作品としての出来栄えを高く評価している。しかし「フォーム」の不在という点に関して、両者の評は完全に逆行している。「フォーム」の不在にもかかわらず『ニクルビー』を評価したフォースターとは対照的に、「フォーム」や統一性の欠如ゆえにこそ『ニクルビー』は評価に値する、そうタンブリングは主張するからである。まずは本書全体、第一章から第六章までの内容をまとめつっ、その議論の舵取りを確認していこう。

第一章は『ニクルビー』を前半,中盤,後半の三つに分け,分冊出版の形態やプロットの展開について丁寧に記述していく.あわせて,それぞれの時期にディケンズの周囲で起こった出来事も提示されるが,この並列的配置にあたってのタ

ンブリングの筆運びは、伝記研究が嵌まりがちな陥穽を見事に避ける手練れぶり である。フィクション世界と作家の生活との間に一見した関連があれば、その類 似に飛びついてしまいたくなるのは世の常だが、タンブリングの梗概は、あくま でも自然に、淡々とした調子で『ニクルビー』の展開とディケンズの生活とを書 き留めていく、たとえばディケンズがフォースターに宛てた手紙の内部で Crummles と Cromwell をかけた地口をたたいていたこと (演劇潰しともいえる ピューリタン統治者の横顔と旅一座の支配人とを結びつけるディケンズの奇想は 興味深い). 分冊出版途中の段階で、劇作家たちによって多くの(海賊版ともいえ る) 舞台化が行われ、時として本家ディケンズの作中で明らかにされていない重 要なエピソードが先取りされてしまったこと、一方で『ニクルビー』側からの意 趣返しとして、海賊版の作者たちが揶揄的に作品に導入されたこと等が述べられ る(21)、タンブリングはこうした考察を通して、小説と芝居、本家と海賊版と いった二極の間をつなぎ、その双極をともに自らのうちに引き入れ、混然一体と なって完成に向かう『ニクルビー』のありようを丁寧にあぶり出していく、さら に、「フォーム」を重視するよりもむしろ、こうして相反する要素をすべて包含 して「フォーム」を内側から崩していくような豊かさこそが『ニクルビー』の魅 力である、と主張する、最終的に、そうした魅力を正しく理解しきれず、結果と してディケンズの想像力を「飼いならして」しまった、当時のブルジョワ読者た ちの (そしておそらくはその後の批評家たちの) 反動的な姿勢に異を唱えるので ある (31).

続く第二章は、忘れがたい悪役スクイーアーズを取り上げ、彼が単に教育の惨状を体現する平板なキャラクターではなく、親の怠慢、社会の偽善などさまざまに異なる問題系をその身に引き受けていることを浮き彫りにする。また社会の腐敗にとどまらず、家庭(主にもちろん母)に対してディケンズ自身が抱え込んだ葛藤さえも映し出している、とタンブリングは指摘する(44). さらに伝記的・社会的側面を離れ、Wackford Squeers という名前に注目し、Tom Jones に出てくる二人の教師 Thwackum と Square の名前との近似についても議論する。こうしてスクイーアーズという存在は、『ニクルビー』の作品世界において、18世紀と19世紀という双極にまたがり、複数の対立軸の間を忙しなく往来し、一見して無関係/対極的な観念をすべて自らのうちへと内包していく主体として提示される。そしてこれらの分析を通じて、スクイーアーズの複層性/複数性と『ニクルビー』という作品全体の相似的関係が明らかにされるのである。

第三章では、「叙事詩」と「小説」という二つのジャンルと『ニクルビー』との関連性が論じられる。主としてヘーゲル、ルカーチ、ノヴァーリスらの論が引き合いに出されるが、ヘーゲルとルカーチが「叙事詩」と「小説」とを対照的で

対立的なジャンルとして捉えたのに対し、ノヴァーリスの定義する「小説」とは 「現実の神話化」に等しく、「叙事詩」との対立において自らを規定するのではな く、むしろそれら他のジャンルとの混淆のなかに成立するものである。そしてタ ンブリングもまた.こうしたジャンル混淆/融合的作品として『ニクルビー』を 位置づける(62-65)。または筆者には少なくともそのように思われる。「ように思 われる | というのは、筆者がこれらのジャンル論に十分に精通していないという 力不足を差し引いても、タンブリングの論陣そのものが、個々の批評家の言説を いかに腑分けるかについて明示的でなく、やや散文的に思われるためである。い ずれにしても、ここからタンブリングはカーライルへと議論を移し、『衣装哲学』 のトイフェルスドレック (による書き物) に象徴される統一性の不在を『ニクル ビー』の作品世界と接続しながら、最終的にディケンズ特有の「ヒューモリズ ム | を、フランス的な新古典主義へのアンチテーゼとして読み解いていく (77)。 さらにドイツの小説家ジャン・パウル・リヒターの「笑い」についての分析に寄 せて、「笑い」とは笑う主体と笑われる客体とのあいだの明確な分裂を前景化す るものではなく、誰かの笑いが他者の笑いを誘ううち、おのずと自他の境界が溶 解していくような行為であるとして、こうした集団的経験の文脈において、ディ ケンズ的な「ヒューモリズム」や「寛容」の精神を捉えなおしている (84).

第四章では、パントマイムとメロドラマというテーマが掲げられ、「演劇」 ジャンルと『ニクルビー』との親和性が議論される. まずは『黒い瞳のスーザ ン』等の演劇作品と『ニクルビー』との影響関係が考察され、続いて「演劇」的 なものの上に交錯する二つの対極的な概念や、その反転のダイナミズムへと議論 の焦点が絞られていく、たとえばパントマイムは、コミック要素と暴力的要素と を結びあわせるものとして分析され、メロドラマは非日常と日常、過剰に芝居が かった態度 (Theatricality) と自然なふるまいとの対比に即して論じられる. さら にタンブリングは、クラムルズの実際の舞台がきわめて古典的で新鮮味のない演 目ばかりを扱うのに比べて、舞台を降りた彼のほうがよほど芝居がかっていると いう反転に議論を移し(95)。日常と非日常とがその位置を交換しあう様子を確認 する、また「小説」が、一人の読者と一冊のテクストとのプライベートな対話に 基づいて消費されるのに対して. 「芝居」が複数の上演回ごとに. またはオー ディエンスとの有機的関係のなかで、毎回新しく規定しなおされる、という対照 性も議論され、こうして「芝居」は「見るもの/見られるもの」との安定的関係 を揺さぶり、問題化し、反転させるものとして定式化される、最終的にタンブリ ングは、さまざまな主体/客体へと次々に転移していく演劇的なダイナミズムが、 『ニクルビー』のそこここに見出せる、と結論づけている (103).

第五章は『コングロメレーションとヒポクリシー』といういささか新奇なタイ

トルを掲げる. 前者の「コングロメレーション」とは. (タンブリング必携の) OED によれば「雑多なものがひとまとまりとなったさま」を指すのだが、ディ ケンズの作品世界では逆に「まとまり」よりも「狂気」や「拘束」などを示唆し、 最終的に「文法的には正しく構築されているにも関わらず、意味をなさないよう な言語への従属」状態を示す(112-13). こうした意味をなさない言葉の羅列への 従属状態は当然ながら. 『荒涼館』における「法」のテーマを想起させるが. タ ンブリングは続いて、「法」という一見して「フォーム」に拠って立つ言説が、 ディケンズ作品のなかでは「偽善」と表裏一体のものとして示される点に議論の 足場を移し、『リトル・ドリット』、『ハード・タイムズ』その他作品内のエピ ソードを次々に取り上げつつ、ディケンズ作品における「フォーム」とは、そも そも内的破綻/矛盾をはらむものとして描き出されている. と主張する (114-117)。ただし一方で、「フォーム」や「偽善」とは、真なるものを覆い隠す 偽なる/虚なるものである。という単純な二項対立的図式を採用するわけではな い、タンブリングは、本来的に「真なる自己がある」という前提そのものを転覆 し、ディケンズ作品における「偽善」を、オリジナルのない場所にさまざまな 「自己」が往来した状態として捉えなおすのである.こうして本書は.安定的な 「フォーム」にこだわり、そこに価値を見出そうとする批評家の無意識を内側か ら崩し、芸術とは本来的に、「自らがまとう形式を批判的に照らし出すべきもの」 であり、ディケンズ作品も当然その潮流に属するものだ、と結論づけている (117).

最終章にあたる第六章は、まずは『ニクルビー』のなかに描かれるロンドンのトポグラフィーを作品全体のアレゴリーとして読み込み、作中のロンドンが開発途上の都市としての勢いや煌めきから切り離され、ラルフの死を予見させるような暗く不健康なメタファーに満ちている点に注目する(ちなみに『ニクルビー』のなかの重要にして見落とされがちな「靴墨瓶」への二度にわたる言及[第 14章と第 40章]もきちんと指摘されている(134)——こうした読みの細かさはいかにもタンブリングらしいといったところだろう)。続いて議論は、ロンドン一帯を覆う暗さから「死の舞踏」のテーマへと接続されていくのだが、ここまで梗概を追ってきた読者は当然お気づきであろう、本書タイトルにおいて作家作品名の向こうを張る形で堂々と提示される「死の舞踏」は、最終章後半においてようやくきちんと前景化されるのである。「死の舞踏」とは、黒死病などによる夥しい数の「死」の出現に見舞われた中世後期に、多くの芸術作品(主に絵画)で取り上げられたモチーフであり、さまざまな人々が死神/骸骨と踊るさまを描写することで、生前の階級の上下や富の多寡に関わらず、人に普遍的について回る死の存在を照らし出すものである。しかしそれは、単に死の恐怖や陰惨さを劇化し

たものではない、そこには「死神を相手に踊る」という刹那的な享楽もまた顔を出しており、踊り手である人間は「死」の主体としての立場と、「死神のダンス」に誘われる客体としての立場を併せ持っている。タンブリングは、両義的かつ両者の間の葛藤/運動として読み解かれる「死」のモチーフを、ホルバイン、トマス・ローランドソン、ホガースなどの絵画を例に引きつつ、ディケンズの作品世界と結びつけていく。こうして本章は、絵画と小説の枠を超え、ときに俊敏な、ときに悠々とした足取りで、大胆に議論を展開させていくのである。とはいえ時折、「さすがにそれは少し無理があるのでは」と言いたくなるようなストライドの大きすぎるステップもないわけではない。とりわけラルフの自殺のシーンの分析において、彼の背景をなす屋根裏部屋やそこに散乱する事物が「薬屋」の棚を想起させるものであり、その「薬屋」とは回復/復活を謳いながら実のところ病/死と結びつく両義的な立ち位置を体現する、という議論(151)などは、付いていくのにいささか骨が折れると言わざるを得ない。

ここまで見てきたように、タンブリングは『ニクルビー』におけるフォームの不在を否定的に捉えようとはしないし、また一方で「フォーム不在の何が悪い」と開き直るような単純に修正主義的なアプローチを採用するわけでもない。むしる『ニクルビー』の魅力とは、何らかのフォームとその対極との間を忙しなく往来し、自らの規定する形式を打ち崩し、主体と客体の位置を絶え間なく反転させながら、また次の対象へと転移していくような運動そのものとして読み解かれている。そうであってみれば、「フォーム」の問題に焦点を絞る本書自体が、書籍としての「フォーム」に比較的無自覚かつ呑気であるのも、『ニクルビー』という作品への意図せぬ/または意図的なオマージュであるのかもしれない。そして「死の舞踏」が最終章後半までほとんど議論されないという点についても、タンブリングの華麗にして軽快な議論のステップが、不在の「舞踏性」を補うアレゴリーとして機能しているのかもしれない。

いずれにしても、常に議論をきちんと構築し、章ごとに金太郎あめを切り出すようにして同じモチーフを提示しつつ、本としての「まとまり」をひたすらに正当化するだけが、あるべき「文学批評」の姿ではない、タンブリングの自由にして軽妙な足さばき筆運びは、そう言っているように思われる。むしろこの書評が、論じるための足掛かりを探すあまり、「金太郎あめ」を求めて、無理やり「フォーム」らしきものに本書をはめ込んでしまっていないことを、筆者は切に祈るばかりである。そして、やはり付け加えておくべきだろう、本書を読む楽しみは単にこうした議論のステップの軽快さにとどまらず、タンブリングの面目躍如とも言える OED へのふんだんにして (時折恣意的とも思われる) 自由な言及を追うことにもある。実際、『ニクルビー』を形成する「言葉」そのものへのタン

書評

35

ブリングのこだわりや、おそらく辞書を引く作業そのものへの彼の強い愛着に触れると、研究者のはしくれとして羨望に近い気持ちを覚える。そして最後に、こんなにも軽やかにして自由な議論展開で「舞踏性」を論じるタンブリングの「名前」自体が、Tambling/Tumblingというもつれた足さばきを提示する皮肉を思い出しておこう。その妙なる面白さに感心することで、この書評の結論としたい。

引用文献

Forster, John. "Review of Nicholas Nickleby." Examiner, 27 Oct. 1839, pp. 677-8.



中田元子 (著), 『乳母の文化史

――一九世紀イギリス社会に関する一考察』

Motoko NAKADA,

A Cultural History of Wet Nurses:

A Study of British Society in the Nineteenth Century (286 頁, 人文書院, 2019 年 1 月, 本体価格 2,800 円)

ISBN: 9784409140673

(評) 瀧川宏樹 Hiroki TAKIKAWA

本書は、そのタイトルが示す通り「乳母」に焦点を当て、19世紀イギリス社 会における乳母の実態や表象を緻密に探り、乳母雇用の根底に存在する「授乳」 に対する人々の態度を様々な角度から眺め、授乳の文化性を明らかにしようと試 みた研究書である。表紙にも使用されているクレトフォンテ・プレティの絵画 《乳母》(1865) から始まり、母親向けの様々な育児書や手引書、新聞『タイムズ』 掲載の乳母の求人・求職広告, 医学雑誌, 文学作品 (チャールズ・ディケンズ 『ドンビー父子』. ジョージ・ムア 『エスター・ウォーターズ』). 母親たち (や彼 女らを取り巻く家族をはじめとした人々)の証言など、多角的な視点を得られる よう数々の資料から乳母を取り巻く文化に迫っている。また、所々に、乳母や授 乳の場面が描かれた絵画や挿絵、乳母の雇用実態を示すグラフ、当時の授乳器具 や授乳の様子の写真などの視覚的な資料が散りばめられており、本書の読者が当 時の乳母や授乳の様子をイメージしやすいようにもなっている。不勉強な評者は これまで乳母に関してほとんど知識をもってはいなかったが、それでも大変分か りやすく、説得力もあり、最後まで一気に読むことができた、終章では現代社会 において乳母が復活している点に触れ、乳母をめぐる問題は決して過去のもので はなく現在の我々の問題であり続けているという。文学離れが進む現代社会にお いてヴィクトリア朝文化を研究することの意義にも触れている。さらに、付章と して、それまでに著者によって明らかにされてきた乳母や授乳に関する考え方が、 海を越えて明治初期の日本にいかに影響を与えたのかも探っており、イギリス国 外というさらなる視野の広がりを最後に示している。まさに至れり尽くせりな研 究書というのが、評者の率直な感想であり、ぜひ一読をお勧めする研究書である. 欲を言えば、文学作品で大きく取り上げられているのは2作品だけなので、他の作品の乳母表象に関する著者のさらなる論考をぜひ読ませていただきたい.以下、各章ごとに内容の紹介をしたい.

序章「乳」母という不可解な存在」において、本書では、「乳母」を、授乳を行わない育児係としての乳母ではなく、雇われて他人の子どもに授乳を行う乳母に限定すると定義し、そこから乳母自身の子どもはどうなるのか、なぜ生母は授乳しないのかという疑問を投げかける。乳母の盛衰に関しては、当時の国勢調査で乳。母が家事使用人の中の乳母として一括りにされており、実数が不明という問題があるため、研究者の間でもその衰退時期を、19世紀前半から始まったとする見方と、19世紀半ば以降に衰退したという見方とに意見が分かれているとのことである。このように曖昧な立場に置かれた乳母の存在を、様々な資料を用いて以下で浮き彫りにしていく。

第1章「乳母雇用の背景」では、19世紀イギリスでなぜ乳母が必要とされた のかを、乳母哺育と人工哺育の観点から考察している。その際、風刺画、育児書 や手引書、文学、雑誌などの資料から、医師や思想家、文筆家らの様々な言説を 取り上げている。上流階級の女性は授乳をしないのが常であった 18 世紀前半に は、授乳をしない上流階級の母親に対し、自分の楽しみを優先させる「心無い」 母親として非難する言説も見られる。しかしそこには、社交界の華としての役割 を演じる妻の美貌が授乳によって衰え、また授乳中に性交渉を行うと乳が汚れ乳 児に悪影響を及ぼすと信じられていたため性交渉を求めづらく、さらには授乳に は避妊効果があるため後継者を望む上流階級にとっては望ましくない等の、夫側 からの授乳を禁止する要望があった。一方で、上流階級との差別化によって自分 たちのアイデンティティを構築したミドルクラスの母親たちは、家庭を守る道徳 的な母親として、自ら授乳する母親を理想像とした。1830年代から 1840年代に 出版された育児書では、自然の掟に従って、母親による授乳を勧めている、母乳 の代わりとなる人工哺育に関しては、19世紀半ばには哺乳瓶や授乳器具の開発 が不十分であったり、動物の乳を代わりに与える場合であっても、その乳の新鮮 さや清潔さを保つ問題があったりと難しい状況であった。実際に不衛生な人工哺 育による下層階級の乳児死亡率は 40% から 90% という高さであった.授乳をし ないという上流階級の文化、またそれに代わる人工哺育の安全性の欠如という理 由から、乳母は必要とされたのである.

第2章「乳母雇用の実態と問題」では、データ不足のため乳母の実数を知ることはできない中、『タイムズ』掲載の乳母広告の件数を見ることで、乳母雇用の増減傾向の把握を試みている。著者は『タイムズ』の1821年から1896年までの5年ごとの毎月最初の1週間(月~金)の乳母の求職・求人広告件数を調査して

いる. その結果 1856 年から 1861 年にかけての件数が一番多く. 1859 年から 1860年代にかけて未婚の乳母の雇用に関する議論が盛んであったことも踏まえ、 この時期が乳母雇用の最盛期であったと結論づけている。そして 1866 年以降の 急激な広告件数の減少は、乳母雇用の需要の減少を反映している、また、育児書 や新聞雑誌等の言説から、乳母への懸念、乳母の子の運命、未婚の乳母論争に関 して実態に迫っている。19世紀半ばの医学雑誌『ランセット』では、授乳に よって乳母の気質が赤ん坊に伝染し、乳母の感情が乱れていた場合は赤ん坊に致 命的な影響を与えると考えられていたため、乳母選びには慎重になるようにと助 言をしている。その他、乳母と赤ん坊間の病気感染。アヘンを与える乳母、乳母 と他の使用人との軋轢などに関しても育児書等で助言されており、乳母に関する 懸念は多々あった.一方で乳母自身の子どもは.乳を与えられずに死に瀕してい たが、大抵の雇用者は乳母雇用によって乳母の子の命が犠牲になっている点をあ まり認識していなかった. ハリエット・マーティノーは乳母の子の死に関して. 仲介役として乳母を紹介する医師の責任を追及している。しかし仲介役という立 場にいたからこそ、紹介者としての自分への非難にもなってしまうため、医師た ちは乳母の子の犠牲という事実を指摘できなかった。著者は1861年に『英国医 学雑誌』に掲載された論説を、医学会が乳母の子の死に関する医師の責任を認め た初期の例としている。ところが、こうした乳母雇用の厳格化は未婚の乳母の失 業を意味し、母子とも死に至ることとなる、未婚の乳母雇用に関しては賛否両論 あったが、悪い男に騙された娘を、娼婦になる道から救済できるという賛成意見 もあった.

第3章「ドンビー氏の乳母対策」では、『ドンビー父子』における乳母ポリー・トゥードルをめぐるやり取りに焦点を当てている。例えば、ポリーをドンビー氏に紹介する場面で、トックス嬢は成長した子どもたちを連れて行くが、彼らは乳母の乳の良好さを示す点での判断基準になっていた。長男の顔にある赤い傷跡を生まれつきの梅毒性痘瘡ではないことも確認し、乳母が病気持ちではないかという疑念を追い払う。このようなトックス嬢による厳しい検査は、当時の乳母に対する懸念を表している。また、スーザン・ニッパーのポリーに対する敵対心から、同じ使用人でも給料や待遇に恵まれている乳母への嫉妬や軽蔑が読み取れ、使用人の間の軋轢も描かれている。一方でドンビー氏は、乳母を雇うことで下層階級とのつながりができることや、自分の子どもが乳母の子どもと取り替えられないかという乳母への懸念も抱いている。それを拭い去るべく、ポリーの呼び名をリチャーズに変え、家族との接触を禁止し、乳母をやめた後は養い子のことは忘れるなどの条件を出し、ポリーから社会的属性をはぎ取り、乳母を商品化しようとする。しかし、乳は商取引の対象物品であるが、一方でそれに伴う授乳

というサーヴィスには提供者の心が伴う.子ども好きのポリーはフローレンスに関心を持ち、ドンビー氏に掛け合い、フローレンスとポールが一緒に遊べるように取り計らう.これを筆者は、ドンビー氏がポリーの心を受け入れたと解釈する.それを象徴する出来事が、ドンビー氏がポリーの長男を自身が関係する学校の給費生枠に推薦するという、給与以外の褒美を与えたことである.乳母に家族との接触を禁ずるという条件を出しながらも、ドンビー氏は自らその条件を逸脱している.これに呼応するかのようにポリーもまた条件を逸脱し、ポールたちを自宅に連れて行き、結局ドンビー氏の商取引の手法として乳母を制御しようとする試みは失敗するのである.

第4章「乳母の声」では、乳母を雇う側ではなく、乳母自身の主張に耳を傾け、 求職広告から、雇われたいと願う乳母の知恵や戦略を読み取っている。例えば 「医師の証明書あり」という文句で自身の健康状態をアピールする広告もあれば。 「田舎出身」という言葉も都会出身よりは健康アピールになったようである。年 齢に関しては医師が勧める推薦年齢が30歳であり、それ以上の年齢の乳母には 遠慮がみられる.「夫は不在」という文句もトラブルを避けたい雇用主には響い たようである。19世紀半ば以降「家事に熟達」という文句が出てくるのは、人 工哺育の安全性の高まりから乳母自体が不要になってきたため、他の乳母との差 別化をはかったためとみられる、このように乳母広告から、雇われようとする乳 母たちの、当時の乳母雇用の現実に即した知恵が読み取れる。また本章では 1894 年に出版されたジョージ・ムアの『エスター・ウォーターズ』を、乳母を 主人公にした初めてのイギリス小説として取り上げている。 未婚の母の子どもを 預かるベビー・ファームという施設があったが、世間一般の了解では、未婚の母 は自分の子どもを邪魔者のように考えており、その始末を引き受けるのがべ ビー・ファームであった。世間に疎い未婚の母エスターは、ベビー・ファームに 我が子を預け乳母として働く、そこで雇用主であるリヴァーズ夫人が健康なのに 自ら授乳をせず、これまで夫人に雇われた乳母の子どもが既に2人死んでいるこ とや、エスターの子どもの心配など一切しない夫人の様子を目の当たりにし、エ スターは雇用階級の母親の身勝手さや、ベビー・ファームのような乳母の子ども を葬り去る仕組みを批判する、この作品は、乳母がいかなる犠牲を払っているか、 乳母雇用階級の欺瞞、未婚の乳母がリスペクタブルな母親であることを、乳母の 視点から暴いている.

第5章「母親たちの試練」では、現実の母親たちの妊娠、出産、子育ての様子を、本人や周辺の人々の日記や手紙、伝記から探っている。乳母雇用階級の母親から、キャサリン・グラッドストン、キャサリン・ディケンズ、イザベラ・ビートン、キャサリン・ラッセル、フローラ・アニー・スティールの5人を取り上げ、

さらにヴィクトリア女王や、『母性 ―― 労働者階級女性からの手紙』(1915) に収 録された労働者階級の母親たちの証言にも注目している。以下キャサリン・ディ ケンズに関する項目を取り上げる。キャサリン・ディケンズは20歳から36歳ま でほとんど妊娠中か産後という状態にあり、多くの場合キャサリン自身は授乳し ていないと考えられる。第1子チャールズの出産時、キャサリンの体調が芳しく なく授乳が出来なかったため乳母を雇った、妹メアリ・ホガースの手紙によると、 キャサリンは授乳ができないことを悲しんでいた。キャサリンは授乳を母親の愛 の証と考え、授乳しない母親は子どもの愛情を失うという当時の医師による脅し を真に受けて悲観している.しかし第2子以降も同じような状況で授乳できず. 第5子の際に至っては、ディケンズが産後キャサリンと2人で大陸に滞在する計 画を出産前から立てており、すでに母乳を与えない予定であったことが伺える. キャサリンが産んだ10人の子どもうち、第9子以外はみな成人しているが、乳 母の存在があってこそなのである。キャサリンは第1子の新米母の頃は授乳を母 性愛とみなす規範にとらわれ自分を責めていたが、次第にその考えから脱して いったようである。キャサリンの例は、授乳する母を理想とする考えがミドルク ラスに広まっていたことを示している.

終章「乳母の復活」では、安全な人工哺育の確立によって乳母雇用はなくなっていくが、21世紀に入って乳母が復活したというニュースに触れている。ある記事によると、アメリカの俳優や実業家などとして働く裕福な母親たちが、容姿を保つためや豊胸手術によって授乳ができないなどの理由で乳母を雇うとのことである。これに対する読者の反応において、母子間の愛着をないがしろにしているとして乳母を雇う母親への批判が相次いでおり、まさに19世紀の授乳しない母親への批判と同じである。著者はこれらの記事から、現代において母乳哺育規範がいかに強いものかを読み取る。しかしその一方で必ずしも母乳哺育に優位を認めない文化がある点にも着目し、母親による授乳は、生存のための普遍的な行為のようにみえるが、時代や社会に大きく影響される文化的営為であるとまとめている。(紙幅の都合上、付章「明治初期日本の母乳哺育と乳母についての言説 一、欧米事情流入の影響」は割愛する。)

以上が本書の内容の紹介になるが、最後に私見を述べたい、本書の第1章および第2章でかなり詳細に乳母に関する背景知識が与えられていたので、第3章において『ドンビー父子』における乳母や乳母を雇用する者の描写が、いかに当時の乳母にまつわる考えや態度を反映しているのかを理解することができた。第5章のキャサリン・ディケンズに関する項目と照らし合わせてみると、1837年1月に第1子チャールズが誕生したのを皮切りに、1846年の『ドンビー父子』連載開始までにディケンズとキャサリンの間には計6人の子どもが誕生していた。

著者は本書第3章において、トゥードル家で生まれた子どもの1人が亡くなっている描写にも注目し、ポリーが再度乳母として働きに出たことによる子どもの死の可能性をそこに読み込んでいる。先に言及したように第5子誕生の際に大陸行きの計画を立てている様子からして、ディケンズは『ドンビー父子』執筆時までには乳母雇用にすっかり慣れていたと言えるであろう。この点を踏まえると、乳母経験のあるポリーの子どもが死亡理由も明記されずに亡くなっているという1文が示す意味はかなり重みのあるものに評者には思えてくるのである。



坂井妙子,

『メイド服とレインコート —— ブリティッシュ・ ファッションの誕生』

Taeko SAKAI,

How Britain Became a Nation of Gentlemen and Ladies in Style

(本文180頁+注・参考文献ほか36頁, 勁草書房,

2019年2月25日, 本体価格: 3,000円)

ISBN: 978-4-326-65420-8

(評) 三宅敦子 Atsuko MIYAKE

イギリスと聞いて、日本の一般的な人は一体何を思い浮かべるだろうか、今ではロンドンの街中で見ることもなくなり、おもちゃの世界限定となっている、hop-on hop-off が可能な階段付きの真っ赤な二階建てバス? それとも赤い丸に青い一文字デザインの、ロンドン地下鉄のロゴ? ひょっとしたら、復路のヒースロー空港免税店で、ただ缶が欲しくて思わず手を伸ばしてしまう、さほどおいしくもないお菓子が入った赤い電話ボックスの缶? そう、日本人の多くは、イギリスをお洒落な国と思っている、素敵なデザインは土産用の小物に限らない、一時期日本を席巻したバーバリーや、パンク・ファッションというジャンルを築いたヴィヴィアン・ウエストウッド、未来の王妃ケンブリッジ公爵夫人のお気に入りブランドとして、頻繁にメディアでその名が上がるアレキサンダー・マックイーン、サヴィル・ロウに並ぶ高級紳士服店に至るまで、紳士・淑女のためのファッションは、伝統の国イギリスの素敵なイメージを、世界中に広めてくれる一大産業となっている。

しかし、イギリスに対してお洒落な国というイメージを抱く人の多くは、実際のところ、イギリスでの長期滞在の経験が乏しいことが多い。そういった人たちにとって、イギリスはもっぱら人気の短期滞在先の一つに過ぎない。たいていは観光客として、ロンドンのポッシュなエリアにあるお店を訪問し、ガイドブックや SNS で話題になっているアイテムを購入し、ロンドン以外ではめったに見かけない、金髪碧眼で背が高くお洒落なスーツをシュッと着こなした「イギリス

人」とすれ違っては、「さすが、イギリス!お洒落だね!」と何度も繰り返し、 それがイギリスのすべてであると勘違いして帰国する。彼らの旅は、「あそこ、 よかったよ」という口コミをもとに構築された「限られたグループ内における想 像の共同体としてのイギリス」への旅なのである。

しかしながら、そういった口コミが存在しない地方都市での滞在経験者なら、到着後、目前に広がる「イギリス」が、自分が想像していた「イギリス」と全く異なり当惑した経験があるだろう。だらりとした T シャツや、何とも不思議な色合いのコーディネートに身を包んだ、ハンプティ・ダンプティやトゥイードルダムとトゥイードルディーたちが、目の前をゆっくりと歩いている。はて、「イギリス」はお洒落な国ではなかったのか?

『メイド服とレインコート ― ブリティッシュ・ファッションの誕生』は、多くの日本人が抱きがちな、お洒落なファッションの国というイギリスのイメージが、実のところ「一九世紀後半から一九二〇年ごろ」(1)にかけて、ミドルクラスが発展させた様々なファッション・アイテムに起因することを論じている。とはいえ本書には、伊勢丹百貨店が登録したこともある、日本人好みのタータン・チェックの話は登場しない、タータンについては、エリック・ホブズボーム編の『創られた伝統』(The Invention of Tradition)に任せておこう。本書で取り上げられるのは、英文学者にもっとなじみのあるシャーロック・ホームズのレインコートや、ハンナ・カルウィックのメイド服、女性の乗馬ファッション、海辺の保養地での花柄ワンピース、ラファエル前派たちのミューズからインスピレーションを得たリバティ社の「アート・ファブリック」で作られたエステティック・ドレスである。

まず「序章 イギリス人とファッション」では、ブリティッシュ・ファッションが「一九世紀後半から一九二〇年ごろ」にかけて、「ロンドンで考案、開発され」、その「すべてがイギリスのモダニティに根ざしている」(1-2) ことが論じられる。この時期、それまでファッションにおいて多大な影響を誇っていたパリが、政情不安のためにモードの中心としての地位を失い、変わってロンドンが台頭してきたことが指摘される。そして、イギリスの国内事情として、コスモポリタン都市としてのロンドンの活気や、消費文化におけるミドルクラスの女性たちの地位向上が、その素地にあったことが続けて指摘される。それと同時に「一八世紀半ばから末にかけてフランスで熱狂的な支持を得た」(9) イギリスの紳士服と比較して、垢抜けしない女性ファッションの改革こそが、「一八世紀末以来、フランスへのコンプレックスと敵対心」(8) を解きほぐす策であり、それこそが、「ブリティッシュ・ファッションを発展させる原動力の一つ」(9) となったと、著者は論を展開する。

続く「第一章 ミドルクラスのファッション・センス」では、19世紀後半に刊行された『イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン』(以後 EDM と表記) や『レディーズ・キャビネット・オブ・ファッション』、『クイーン』といった雑誌掲載の記事のほか、『一日一シリングでうまく装う方法』などの指南書を比較分析しながら、この時代のミドルクラスの女性にとって、道徳性が装いの基準であり、「質素の美徳と実用性」(20)がキーワードであったことが論じられる。コルセットでさえも、「レディーになるために必要な身体・精神修養」(29)とみなされていた。さらにこの章では、イギリス人が本来は色彩音痴であることが明らかにされる。フランスの色彩論の専門家であるミッシェル・ウジェーヌ・シェブルールの著作が英訳されたことがきっかけとなり、色彩感覚を教育によって磨くことの重要性が説かれるようになる。そして、ちょうどこの時期にイギリスで合成染料の開発が大きな発展を遂げたことと相まって、服飾におけるイギリスらしい色の使い方が誕生した。

「第二章 ホームズはレインコートで沼地を這い回る」は、文字通り、ホームズー色である。ホームズといえば、鳥打ち帽とケープ付きのコートというイメージが定着している。しかしながら、この服装はドイルによる指定ではなく、挿絵画家の翻案であることが指摘される。著者は、この従来のホームズのイメージを掘り下げるのではなく、庶民的なゴム引きコートのマッキントッシュと、高級テーラーであるアクアスキュータムやバーバリーが発展させた防水コートの服飾史を、各社の広告の分析や、EDM及び『マンチェスター・ガーディアン』紙の記事、エチケットブックなどの文章と、同時並行的に比較しながら、防水コートがいかに当時のハイテク衣料であったかを分析する。その後ホームズ作品のテクスト分析から、ホームズ作品出版当時にはすでに、ミドルクラスの男性にとってゴム引きマッキントッシュは、ダサいファッション・アイテムと化していたことを明らかにする。そこから、ホームズがマッキントッシュではなく防水コートを着ていたというテクストの描写は、ホームズの挿絵から得る「やや戯画化されたホームズ」像とは異なり、「高い技術、洗練と知性を併せ持った上層ミドルクラスのインテリ男性像」(54)を示唆していることを導き出す。

変わって「第三章 乗馬服でキリっと美しく」では、モダンな女性の象徴となった乗馬服の歴史が解き明かされる。19世紀後半に入り乗馬が趣味として大衆化すると、馬に乗り慣れていないミドルクラスの女性たちが安全に着用できる、エプロン・スカートやキュロット・スカートの改良・開発が盛んになる。またヴィクトリア朝後期に入ると、「健康と活力」(78)を美ととらえる動きが高まったか、その動向に合わせて、スポーツにふさわしく、かつ「一九世紀初めに男性スーツが完成させたテーラーリングのコンセプト —— 正確さ、完璧なフィッ

ティング、地味なエレガンス」(80)を持ち合わせた乗馬服が、それまでの外出着にとって代わる、旅行にも最適なオルタナティブ・ファッションとして確立していく。著者はイポリット・テーヌの著書『イングランド・ノート』を引用し、「イギリス人のファッション・センスのなさを全体としては見下して」(86)いたテーヌでさえ、「実用的で質素な」女性用乗馬服は、「男性の良き伴侶」(86)としての「イギリス独自の新しい女性像を具現」(87)したものとして称賛したというエピソードを紹介する。このエピソードは、改良乗馬服が今日のブリティッシュ・ファッションにつながるという著者の主張を裏打ちするものである。確かにツイードのハッキングジャケットは、今でも、エレガントな英国ファッションの代表格といえるだろう。

第四章ではアーサー・マンビーの身分違いの恋人として名の通ったハンナ・カルウィックの日記の分析を中心に、メイド服についての分析が行われる。まずメイド服の登場と雇い主による支給の行為には、ミドルクラスの底辺層の家庭で雑役婦を一人くらいは雇える程度の家庭が増加し、女主人とメイドの出自階級が紙一重となったことによる、家庭内での地位転覆に対する女主人の不安感が反映されていることが明らかにされる。そのような状況において、メイドとしての自分にプライドを持っていたハンナは、「男性への従属を表すファッション」(119)としてのレディーの服装を拒否し、そのオルタナティブとしてメイド服を好んで着たという論が展開される。

第五章で取り上げられるのは、日本人英文学者にもおなじみのローラアシュ レイやキャスキッドソンに代表される花柄模様である。1940~50年代に大人 気となったホロックス・ファッション (花柄コットンワンピース) を生み出した ホロックス社は、1791 年創業のプレストン (ランカシャー) の綿織物生産業者で ある.イギリスのレディース・ファッションの代表的な柄ともいえる花柄は、産 業革命の成果であり、染色技術の発展により登場した。1830年代の流行が終息 すると、花柄プリント・コットンは、メイド専用のような生地となる、ところ が、ディケンズの小説『バーナビー・ラッジ』に登場する「ドリー・ヴァーデ ン | を W・P・フリスが描いたイメージが、1870年代に花柄チンツを使用した 「ドリー・ヴァーデン・コスチューム」と呼ばれるスタイルを生み出すことにな る.「プリント・コットンの伝統を独自に解釈することで、古風で安価なドレス をファッショナブルなアイテムとして、従来の服飾産業が直接のターゲットに してこなかった客層」、つまり「とても若く、裕福とはいえない下層ミドルクラ スの女性たち | をターゲットにすることで、「時代遅れの花柄チンツの複製品 で作った安価なドレス」(135)が、流行の最先端に躍り出ることになったのであ る. 時を同じくして、海浜リゾートが大衆化したために、「ドリー・ヴァーデ ン・コスチューム」は、海浜リゾートの典型的ファッションとなったことが明かされる。

これまでの章では、主として雑誌や新聞記事、広告類に加えて、著者によるイ ギリスにおける服飾博物館のコレクションの分析なども紹介され、どちらかとい えば、様々なファッション・アイテムの服飾史をひも解くような内容になってい る. 最終章となる第六章では. これまでの〈もの〉中心の分析から一転して. ファッションとは何かという現代的な課題に通じる理念的要素が、ラファエル前 派のミューズたちのファッションに存在したことが指摘される。つまり「自己表 現としてのファッション | (169) の萌芽が、ラファエル前派のモデルを務めた女 性たちが着用した、初期のエステティック・ドレスに見られると著者は論じる、 このドレスに目を付けたのが「一八七五年創業のリバティ商会」であり、リバ ティ社のドレープが際立つプリント・シルク地のドレスは、『クイーン』誌など に掲載された広告や合理服展での高評価などにより絶賛された.「歴史的な衣服 の『伝統』とそれを独自の技術で健康的・美的に改作、修正した『革新性』 そ の結果としての『スタイルの融合』を実現したエステティック・ドレスは、オー ソドックスなスタイルのオルタナティブとして、ロンドンのファッション界に確 固たる地位を占めたのである」(163). ここに至って初めて、ヴィクトリア朝の 女性服は「階級指標として機能」するという役割を手放し、女性たちは「自身の 想像力、美的感覚を突飛にならない程度に投影できる | 「自己表現の自由 | (169-170) を手に入れることになった. こうして, エステティック・ドレスによって. 「ミドルクラスの人々が抱えた最大のコンプレックスだった芸術性」は. 「イギリ スらしさに加工」されていったと、著者は論じる.

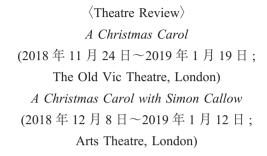
本書の惜しい点を挙げるなら、研究書として読むと、物足りなさが残ると感じるところである。本書の醍醐味でもあり、第六章で著者が指摘している服装が持つ社会的機能の変遷と、本書の副題ともなっている「ブリティッシュ・ファッションの誕生」との関わりについて、もう少し理論的に掘り下げられ、この視点が第一章からもう少し明瞭に貫かれていたら、もう一段階深い議論を展開できたのではないかと考えるからである。

とはいえ本書は図版も多く、服飾史の細かな分析は楽しく読める。19世紀の服装は、文学には関心がないけれど英文学科に来てしまった学生たちの多くが、関心を寄せるテーマであるにも関わらず、入門書的なまとまった文献が少なく、卒業論文で取り上げようとすると、短期間で学問的探究につながるような資料を集めることが難しいテーマである。本書はそういった学生にお勧めできる良書である。なぜなら、しっかりとした注が巻末に付いているからである。学生は注の情報を頼りに、本書で言及された記事を自分で読んでみることができる。そこか

ら、また新たな記事を自分で見つけ、自分なりの卒論に仕上げていくことも可能 だろう。そういった意味でも、図書館に一冊欲しい書籍といえるだろう。

Fellowship's Miscellany News and Reports







(評) 宮丸裕二 Yuji MIYAMARU

『オリヴァ・トゥイスト』を舞台化・映像化しようとするならば主役を務める子役俳優がどれくらい悲壮な顔をしているかで、その成功のほとんどすべてが決まってしまう。そういう乱暴な言い方が許されるなら、乱暴ついでに、『クリスマス・キャロル』においてはスクルージを務める俳優の素の顔がどれだけ陰気で怖い顔なのかで、かなりのところまで決まってくると言ってみることは可能だろうか。それなりの年齢のおじさんならば表情を落とせば誰もが陰気に映りうるというのは甘い考えで、そこは喜劇向きの緊張感のない顔、人として隙のある顔、どこか楽しいかも知れない顔というのはなかなか多くあるものだ。もちろんスクルージは最後に豹変してみせることも大きな役目の一つではあるけれど、そこは年齢を重ねた役者としての力量があれば楽しく笑って「同じその顔にそんな明るい表情もあるものなんだ」と聴衆を驚かせるのは意外に低いハードルといえるのではないだろうか。そうだとしたら、役者の顔つきからほぼ成功が約束されていたといってよさそうな二つの『クリスマス・キャロル』を観る機会に今回恵まれ

たと言っていい。初演の時期からするといささか旧聞に属する作品とも言えるかも知れないが、今年以降の冬にも上演される見込みは続きそうでもあるので、それぞれについての報告がてら、今日の舞台化された『クリスマス・キャロル』の動向を考えてみたい。

一つは、サイモン・キャロウの『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol with Simon Callow)で、トム・ケアンズ (Tom Cairns)の演出で2011年の初演の後、2012年、2016年と断続的に同じグループで上演してきて、今回に至る、同時に本作はある種の映画化をされており、舞台をそのまま撮影した映像が、単発ではありながら英国内各地で繰り返し上演されており、会場に選ばれるのは極めて小規模の劇場でありながらすでに相当数の観客を得ていると思われる。

キャロウと言えば、演劇界きってのインテリとして知られ、そのキャロウが ディケンズにとりわけ興味を示してきたことは演劇にとって幸運なことだった。 実際にディケンズ関連の舞台作品に数多く関わり、長年多くのディケンズ作品を 演じてきた. 『クリスマス・キャロル』についても若い時からスクルージだけで なく、ボブ・クラチットやフェジウィグを演じているし、その活躍はアニメー ション作品にも及んでいる。また、本作を演ずるのと平行して2012年には舞台 『チャールズ・ディケンズの謎』(The Mystery of Charles Dickens) も主演しており、 また、最近ではディケンズの伝記映画作品『Merry Christmas! ロンドンに奇跡を 起こした男』(The Man Who Invented Christmas: 2017年) にもジョン・リーチ役で 登場している.ディケンズの伝記著作も著しているキャロウはディケンズの知識 についても玄人裸足で、本舞台のプログラムにもディケンズについての解説を寄 せているが、それはディケンズの入門者である来場者に向けてディケンズの重要 にして魅力的な本質が伝わる名文で、通常主演俳優が分担する力量を大いにはみ 出している。そして、『クリスマス・キャロル』が生涯で最初に観た舞台であり、 大好きな作品であることも、忘れずに伝えており、そのことは結果として上演さ れる作品内容と恐らく無関係ではない情報なのだろう.

本舞台化の一つの特徴は一人芝居であることである。それにあわせて、舞台美術もいたって簡素である。演出のケアンズが舞台デザインも手がけていて、そこに用意されるものは、街路を描いた背景画が一枚と、それに時計、シャンデリア、窓枠が天井からぶら下がって現れるのと雪を降らせるくらいで、それらもいつの間にかあったりなかったりするだけで、上演に不可欠とはいえない程度の背景である。あとは形状のまちまちな椅子が7つ重ねて積んであるだけである。その中で一人で演じるとなると、演ずる人間が一人というだけではなく、舞台上には物も人も含めて人間が一人だけ立っているのに近い状態で演ずるようなかたちになる。一人芝居というと、私自身は毎年のように日本で上演される市村正親氏の舞

台さえ観ていないけれど、『クリスマス・キャロル』の一人芝居というのは少な くないし、この作品にはなぜかその試みを誘うところがあるようだ。ただ、数多 くの試みがあったからといって、それがやりやすいからだということでもなさそ うである. 『クリスマス・キャロル』の小説世界を再現しようと一人で舞台に 立ったなら、まずどの役を演じるかが問題になる、『クリスマス・キャロル』に は多くの登場人物がいるし、加えて語りの声もあるという意味で、形式として普 通の小説だからだ。もっと言うと、一人芝居でなくとも元々この小説は他の小説 に比べても、特に舞台化に困難が伴う小説だと言っていいのではあるまいか。 『クリスマス・キャロル』がいろいろなかたちで子どもにも親しまれているから 文章としてもさぞ読みやすくもあるかと思いきや他のディケンズ小説に比しても 実は読解が困難な一作であるのに気づくのと同様に、あまりに何度も舞台化され ているからつい忘れがちだが実は舞台化しにくい面を大いに持っている作品なの である。その理由は、ディケンズの語りが与える情報があまりに多くを占めてい て、ダイアローグでなる割合が存外低いところにあるだろう、例えば、冒頭の 「マーリーは死んでいた」という一節からが、ディケンズ自身が繰り返し強調す る通り是非とも抑えておきたい大事な情報でありながら、それを舞台や映像でど う表現するかにかなり知恵を絞る必要があることは、過去の映像作品の数々が 様々な工夫の結果を通じて伝えてくれている通りだ。

さて、語りと登場人物の複数の声について、本舞台化がどう解消しているかというと、キャロウはまず語り手として登場するというスタイルを選んでいる。そして、話が進んで人物が出てくる時、それを仮にその時だけその人物を演ずるというスタイルになっている。従って、登場人物の台詞を言って、かなり役に入り込んでからも、また語り手にいつでも戻るというあり方になっていて、途中途中に「そう、スクルージは言った」と自分で挿入する。スクルージと甥っ子のフレッドとのテンポの速い会話においては、さながら落語のように首を向ける向きを左右で区別しながら二人の人物を表現している。しかし、時々、首の向きがさっきと逆になる。落語であれば、登場人物のアイデンティティを客に知らせる唯一のしるしを左右どちらに顔を向けているかだけに依存させる場面があるので、これを厳密にやることは落語家の重要なディシプリンになってきて、これが逆になるのは台詞が飛ぶに等しい失敗になるわけだが、ここではそこまで厳密に一貫させようと思っていないのは、むしろ台詞内容の方に区別のための情報を込め、また根本のところで演劇全体を語りが補っているからである。

ディケンズ作品の舞台化・映像化に見られる大きな傾向は、シェイクスピア作品と同様、脚本に可能な限りディケンズが書いた言葉がそのまま踏襲されることである。時間の制約から、もちろんディケンズが地の文や台詞として書いたもの

をすべて脚本に反映することができない以上、多くは原作の言葉が削られるわけ だが、原作から一部の言葉を削除した結果が脚本としてできあがっており、元々 原作にない言葉が追記されるという脚本の作られ方は極めて少ない。それだけ、 ディケンズ自身の言葉を残すことがディケンズのアダプテーションにおいては重 視されてきたということだろう、ところが、本舞台化では、地味ではあるものの、 少なからず原作にない言葉の追記が行われている点が興味深い、上演時間は90 分なので、原作にある結構な分量を削っていて、その上での追記なのである。例 えば、親方フェジフィグ氏との会話が原作以上に増幅してあり、親方の楽しそう な様子を伝える場面を長くしてある. スクルージさんに乾杯しようと言われて機 嫌を捐ねるクラチットの妻の怒りもまた長めで「言う诵り乾杯したんだからあの 人の話はこれ以上しないでよね. それでも今から30分は怒りが消えないんだわ とその後を続けている。クリスマスの朝、最初に話しかけた男の子に七面鳥を買 いに行かせて「5分で戻ったらお駄賃は半クラウンだ」のところまでは同じだが、 実際に戻ってきた時のタイムが「4分と27秒だった」と具体的な計測時間をつ け加えている。やってきたその大きな七面鳥が「その脚で立つことはできなかっ ただろう. 立てば蝋さながらポキンと折れてしまったろう | が. 「生きていた時 はどうやって歩いていたか想像もつかない」に変えられていて、おどけて歩く動 きをつけ加えている。こうしたことは、大半が、原作での語りを台詞に取り込み、 あるいは原作での対話のやりとりの回数を減らしてその片方の話者の台詞の中に 取り込み、なおかつ舞台での身体の動きと連動させるということを上手く処理し て見せた結果と言えるだろう.

ただし、ティムの「クリスマスには教会でみんなが脚の悪い自分のことを見ればいいのに」という台詞や、その七面鳥について男の子が「僕と同じくらいの大きさの七面鳥でしょう」という台詞など、削られ、もしくは他の人物の台詞に取り込まれていることも、同じ理由と思われるが、このあたりの台詞が子どもの口から取りあげられていることは惜しいと言わざるを得ない。この作品の魅力である、世界を整然とさせておかないグロテスクさが、台詞の整理とあわせて減じてしまうように思われるのである。

いま一つの舞台化は、オールド・ヴィク劇場の劇場付き演出家であるマシュー・ウォーチャス (Matthew Warchus) が、ジャック・ソーン (Jack Thorne) の脚本を元に演出した『クリスマス・キャロル』 (*A Christmas Carol*) である。初演の 2017 年はリース・イヴァンス (Rhys Ifans) が主演を務め、二年目の今回はスティーヴン・トムキンスン (Stephen Tompkinson) が主演をしている。テレビを主な活動の場としてきた様で、イヴァンスほど映画を通じての知名度はないが、スクルージとしてのその「顔つき」は劣らぬほどできあがっている。

こちらの劇場では対照的に、劇場そのものの演出に努めていた。クリスマス的な照明で飾りつけてあり、舞台には数多くのランプが下がっており、案内の係員の男女はトップハットのヴィクトリア朝的装いで、観客にビーフパイを配ってくれて、そしてみかんを座席に投げてくれる。後で判明するのにはどうやら彼らも劇団員で、座席から舞台に参加したり、裏方の作業をこなしたりする。

削除部分から先に見ると、本作でも、割と重要な要素を思い切って削っていて、例えば、先のクラチット夫人の憤りは、それそのものがカットされ、すんなりと乾杯に移っている。そして、スクルージが棺を見ただけで「明らかじゃないか」と自分の死を自覚するのがとても早く、それまでの兆しや知った時の驚きはすべて省いてあるが、これもよく知られた物語なので観客にいまさら驚きもないかも知れないし、元々原作の段階から自分の死が明かされるまでのくだりは野暮ったいかも知れないから、これが正しいのかも知れない。

ただし、この作品には、原作から削除された部分よりもより新たにつけ加える ことで冒険をしている部分が実に多くある。かなり大胆につけ加えられているの は最後の亡霊の実体が夭折した妹のファンであったという展開である。スクルー ジに幼少期の自身の姿を見せる役割をファンが担い、この少年が思うような人物 になっているかという問いがスクルージの改心の動機づけを与えている。この亡 霊は怖くはない代わりに、お説教臭いことは否めず、ことによったら反省するス クルージを何かに屈服した屈辱的な姿に映しかねない. また, 新しいのは, かつ ての恋人ベルとの再会の場面を挿入し、なかなかに長い対話を設けていることで、 新しいと同時に決して年齢が若返るわけでもないスクルージという人間を後悔の 観点から眺めさせることを観客に促しかねない危険はある.このように.『クリ スマス・キャロル』はお説教臭さや後悔と背中合わせに元々ある。危なっかしい 作品なのだということに改めて気づかされる.それを払拭するのは,もちろん, 最終章を描くディケンズの筆一本であるが、これを本舞台では、大いに歓喜する スクルージで表現している、二階席から舞台に渡した長い布地に、ジャガイモや 果物などを転がして滑り落とし、舞台を収穫物で溢れ返らせるというカーニバレ スクな演出を用いていて、それは入場時のみかんと連動していたのかと納得させ る次第である.

原作に元々書かれていたものを脚本で削除したり加えたりするのに、時間の制約や重点の置き方、その他いろいろな理由があるだろうが、一つには過去の作品からの影響を思わずにはいられない。本舞台では、スクルージの死後に所持品をくすねていく人々の描写がないし、現在の精霊がスクルージに見せる二人の子「無知」と「貧困」をスクルージに見せる場面が省略されている。この二人の子についてはキャロウの舞台でも省略されている。この無知と貧困については原作

を読む読者も多くがメッセージ性の強い部分として受け取るであろう. そして、実際、これは『クリスマス・キャロル』の執筆に先駆けてディケンズが講演を行ったテーマでもあり、また初版本で挿絵の題材にも選ばれている. そのことをキャロウが知らないとは考えにくい. そう考えると、まるっきり違う作りを明らかに志向している今回の舞台化にも、ロナルド・ニーム (Ronald Neame) 監督の映画『クリスマス・キャロル』(Scrooge; 1970)の影響を考えずにはいられない. そして、その影響は削除に限らず、もう二度と会わないだろうと自ら言っているマーリーをもう一度最後に登場させるという追加にも及んでいる. 本舞台での演奏にハンドベルを使っていることにさえも、確言できないまでも、映画の影響のような気がしてくるのである.

今回観劇の機会を得た二作品にはそうした、必ずしも意識されていないかも知れない脚本の伝統の踏襲というものも見られるのであるが、それにも増して見られるのは、追加による原作からの飛躍である。演劇においてはあって当然の創造性というものが芽を吹き始めているということである。ディケンズの言葉だけから脚本が抽出されがちであった『クリスマス・キャロル』が、こうして新たなつけ加えによって膨らみ始めることは、この小説のアダプテーションがようやく次の段階に入ったことを告げているのかも知れない。

2018年度秋季総会

Annual General Meeting of the Japan Branch 2018 at UNITY (Academic Community Hall), Univer Plaza, *Kobe*

日時: 2018年10月13日(土)

会場:UNITY (ユニティ) [神戸研究学園都市 大学共同利用施設]

2018 年度の秋季総会は、神戸研究学園都市の UNITY にて開催されました、独自の着眼が優れた研究発表 (第1部) と、バレエという異色のアプローチの特別研究発表 (第2部)、いずれもたいへん刺激的でした。そして続く第2部は、書評2本立て構成のミニ・シンポジウム、いずれも丁寧な調査に裏付けられた安定感のある発表で、示唆に富む内容でした。プログラム後も聴衆の満足感がほくほくとした雰囲気に表れていました。新野緑先生をはじめ、当日の会場運営にご尽力くださった皆様に心より御礼申し上げます。(松本靖彦)

第1部 研究発表 Short Paper Session

司会: 長谷川雅世 (高知大学) Introduction by Masayo HASEGAWA (Kochi University)

Barnaby Rudge における偽装と犠牲

Disguise and Scapegoat in *Barnaby Rudge* 筒井瑞貴 (神戸大学)

Mizuki Tsutsui (Kobe University)

『バーナビー・ラッジ』は、殺人事件の謎解きと物語中盤から始まるゴードン暴動を描いた2つのプロットから成っている。発表当時からこれらのプロットの結合性の欠如が批判されてきたが、近年の批評では作品の統一性が注目され、2つプロットを結ぶ要素が考察されている。筒井氏は、アイデンティティの問題が作中で反復されて作品に統一性を与えているという新たな解釈を丁寧な読みと共

に示された. この考察はアイデンティティの偽装や誤認が作品の中核にあるという前提から始まっているが、その前提を証明した議論が何よりも斬新で刺激的だった. それは、殺人事件のトリック、つまり加害者が自分が死んだように偽装して被害者に入れ替わるトリックが、ジェイムズ・ホッグが1820年に出版した中編小説"The Bridal of Polmood"に着想を得たもので、その着想が作品の構想に影響を与えた可能性の指摘である. 独自の着眼と丹念な分析を持った本発表は非常に興味深く、筒井氏の今後の活躍が大いに期待される. (長谷川雅世)

Barnaby Rudge の冒頭に配されたウォレン屋敷の殺人事件のエピソードでは、犯人のラッジが殺害した庭師と入れ替わって容疑を逃れる。この「被害者即犯人」トリックはこれまでディケンズが初めて用いたとされることが多かったが、本発表ではスコットランドの作家ジェイムズ・ホッグが1820年に発表した作品集 Winter Evening Tales 中の一篇 "The Bridal of Polmood"においてその先例が見出されることに着目し、ディケンズの蔵書に含まれていたホッグの全集の刊行年がBarnaby Rudge の構想期間と一致する点などから、この作品がラッジのプロットに影響を与えた可能性を指摘した。そして加害者が被害者を装い、被害者が加害者に仕立て上げられるというアイデンティティの偽装を、ラッジの殺人事件のプロット中核をなす要素として位置付け直し、この観点からディケンズが当初から主題として想定していたゴードン暴動をはじめとする作品全体の主題との統一性を明らかにすることを試みた。

ラッジのトリックの変奏は、私的な領域においては、息子を社会的に抹殺しつつ、彼に責任を転嫁して被害者を装うジョン・チェスターや、家庭の平和を乱しながらその咎を亭主のゲイブリエルに負わせ、自身は迫害された受難者を演じるヴァーデン夫人や小間使いのミッグスにもみられる。このような被害者と加害者の関係性をすり替えるという構図が公的な領域で反復されるのがゴードン暴動であり、カトリック教徒に被せていた獣的なイメージがそのまま語り手によって暴徒たちの描写に用いられる時、そして本来は被害者であるはずのカトリック教徒が暴動の加害者として処刑される場面においてその宗教的大義の虚飾性が最も顕在化する。さらに絞首刑執行役人のデニスが語るメアリー・ジョーンズにまつわる逸話が明らかにするように、18世紀のイギリスの法制度においても、社会的弱者を見せしめとして罪人に仕立て上げるような状況がまかり通っており、法を犯す究極の行為であるはずのラッジの行為が法体制そのものと類似した性質を帯びるという、強烈な矛盾が浮かび上がってくることが分かる。

このようにアイデンティティの混乱や,被害者と加害者の関係の偽装といった 要素は執拗に反復されており、作中の一見互いに関連を持たない人物やプロット が、ラッジの行為を軸として緊密に結びついていると結論付けた。(筒井瑞貴)

第2部 特別研究発表 Special Short Paper Session

司会:金山 亮太 (立命館大学) Introduction by Ryota Kanayama (Ritsumeikan University)

ターヴィドロップ舞踊学院の徒弟の行く末 ——『荒涼館』および『リトル・ドリット』におけるダンス分析——

The Future of Apprentices in Mr. Turveydrop's Dance Academy:

An Analysis of Dance in *Bleak House* and *Little Dorrit*

桐山恵子 (京都府立大学)

Keiko KIRIYAMA
(Kyoto Prefectural University)

桐山恵子氏の発表は、門外漢にも分かりやすい、刺激的な内容であった。今日ではバレエと社交ダンスとは異なるジャンルに属するものと考えられているが、19世紀においてはその区別が曖昧であったこと、紳士らしい立ち居振る舞いを身につけるためにもダンス技術の習得は必須項目の一つであったこと、男性バレリーナの社会的評価が時代と共に低下していったこと、当時のイギリスのバレエ装備の貧弱さなど、初めて知ることも多く、蒙を啓かれる思いを何度も味わった。『荒涼館』と『リトル・ドリット』においてダンサーやダンスを習うことの持つ意味を論じた研究は、管見の及ぶ限り記憶がない、ヴィクトリア朝のリスペクタビリティが肉体への嫌悪感を生み、ひいては「身体性」から目を背けさせたことは有名であるが、舞踏芸術として洗練されていったバレエから排除された猥雑さが、異性装を含むパントマイムの形で受け継がれた可能性などについても考えてみたくなった。(金山亮太)

ヴィクトリア朝の劇場で観客を惹きつけた大きな要因のひとつとして,舞台で活躍する子供の存在があげられる。とくにクリスマスのパントマイムなどでは,すべての配役を子供が演じる公演もあり,子役に対する需要は大きかった。セリフを話す俳優として有名になる子役もいたが,大半の子供は,妖精や動物の衣装を身に着け舞台上で踊るダンサーとしての子役だった。そのため舞台での活躍を目指す子供やその親にとっては,演技や歌の教室よりも,ダンス教室に通うことが必須であった。そのような状況を反映して,『荒涼館』のターヴィドロップ舞踊学院には、紳士淑女のたしなみの一つとしてダンスを学ぶ多くの生徒以外に、

本格的な身体表現の獲得を目指す幼い4人の徒弟がいる。徒弟の将来設計として、「ダンスの先生」になることは高い可能性のある選択肢ではあるが、劇場での子役人気に便乗した「舞台で活躍するプロの子役」になるというのも、より直近の将来設計としてあり得たのである。

監獄内での徒弟時代を終えて、プロのバレリーナになった『リトル・ドリット』に登場するファニーは、低賃金の端役を務めていたことから、低レベルの技術しかもたない拙いダンサーのように思われがちだ。しかし当時のバレエ公演の主役はフランス人やイタリア人などの外国人であり、英国で修練を積んだ英国人バレリーナには、最初から主役になれる見込みはなかった。というのも、英国のダンス教室では、つま先立ちで踊ることを可能とした靴、トウ・シューズでの訓練は行われておらず、ファニーのように英国でダンスを学んだ生徒は、トウ・シューズを履きこなす必要がなかった群舞を務めるというのが通常だったのである。

しかし群舞の中にも格差があり、それは舞台上のどこで踊るのか、すなわち位置する列によって決まった。舞台前方から後方に向かって、一列目、二列目、三列目に分かれており、どの列に属するかは技術だけでなく見た目の美しさも影響した。それなりに外見も美しかったと思われるファニーは、一列目か二列目で踊っていたのではないだろうか。

小説におけるダンス教室やダンサーに関する叙述を見てみると、ディケンズのダンスに対する視線は必ずしも好ましいとは限らない。しかし少なくとも、ディケンズがダンス教室で学ぶ徒弟やバレリーナになる人物を描かずにはいられない程度には、ダンスを学ぶあるいは職業としてダンサーを選択するという行為は、ヴィクトリア朝においてそう珍しいことではなかったと考えられるのである。

第3部 ミニ・シンポジウム Symposium

ディケンズ批評の現在 Dickens's Criticism Today

司会:玉井史絵(同志社大学) Introduction by Fumie TAMAI(Doshisha University)

講師:小西千鶴 (神戸市外国語大学)

Chitsuru Konishi (Kobe City University of Foreign Studies)

講師:瀧川宏樹 (大阪工業大学) Hiroki TAKIKAWA (Osaka Institute of Technology)

このミニ・シンポジウムでは、二人の若手研究者がディケンズ研究の現在を議

論した. 二人の関心が教育と子供の表象であったため、それぞれが選んだ研究書をこの二つのトピックを軸に論じていただいた. 小西氏は Nicholas Marsh による Charles Dickens; Hard Times / Bleak House のなかから、特に社会問題を扱った部分を中心に Marsh の議論を要約し、その問題点を指摘した. いっぽう、瀧川氏は Peter Merchant and Catherine Waters (eds.), Dickens and the Imagined Child のなかから、Rosemarie Bodenheimer による 'Dickens and the Knowing Child,' Jonathan Buckmaster による "'Ten thousand million delights': Charles Dickens and the Childhood Wonder of the Pantomime Clown," そして Wu Di による 'Child Readers in Dickens's Novels'の3つの論文を取り上げ、「子供」というトピックの様々な側面を考察した。いずれの発表でもわかりやすく最新の研究が紹介されていたので、聴衆にとって大いに参考になったと思う。二人の研究者の今後の研究への期待を感じさせる内容であった。(玉井史絵)

Chitsuru Konishi (Kobe City University of Foreign Studies)

本発表では、2015年に出版された Nicholas Marsh による Charles Dickens: Hard Times / Bleak House を紹介し批評を試みた、マーシュは、すでにウィリアム・シェークスピアからヴァージニア・ウルフと、時代を超えて数々の作品論を発表している一方でディケンズ作品への取り組みは本書が初めてであり、その意図を新たな視点で「社会小説」と向き合うためと記している、ディケンズは、『ハード・タイムズ』では事実を偏重する功利主義的な学校教育を糾弾し、『荒涼館』では解決を見ない大法官裁判所を批判しているが、果たして、これらの社会システムに対するディケンズの姿勢は終始一貫しているのだろうか、というのが著者の論点である、マーシュによると、ディケンズは読者の怒りをこみ上げさせる点においては成功していると言う、しかし、『ハード・タイムズ』では銀行強盗の話、そして『荒涼館』ではデドロック夫人のスキャンダルと、読者の興味を引きつける俗的なプロットの挿入から社会システムへの関心を薄れさせてしまっていること、さらには社会悪の原因とその責任に言及することはなく解決策の提示もないことなどから、結果的に両作品は社会問題を周知するだけに落着し「社会小説」としての役割は十分に果たしていないと評する.

マーシュの考察において、注目すべきは登場人物たちの役割や貢献度を細かく分析して筋の矛盾点を浮き彫りにしてゆく点である。加えて、登場人物たちの常套句には修辞法を用いて解説し言語学的な視点で文体を読み解いてもいる。これ

らの著者による詳述は作品への理解や興味を深めてくれるものに違いない. しかしながら, 他の資料に言及していないマーシュの分析方法には疑問が残る. たとえば, ディケンズがこれらの作品を執筆していたころ, 作家自身は小説の展開とは矛盾する行動をとっていた. ユーレイニア慈善の運営においては功利主義的なシステムを採用し, 長男のチャーリーには合理的な生き方として商人への道を勧めていたのである. こうした作家の身の回りの出来事を照らし合わせるだけでも,著者の指摘するディケンズの一貫性に欠ける姿勢に対する一つの推測が可能となる. とりわけ作家の道徳観や教育問題における見解を示すにいたって, 物語の中だけの議論から導き出す考察への疑問を提示した.

Peter Merchant and Catherine Waters (eds.), *Dickens and the Imagined Child* 瀧川宏樹 (大阪工業大学)

Hiroki TAKIKAWA (Osaka Institute of Technology)

本著は全12章構成で、執筆者総勢12名からなるアンソロジーである。本発表では以下の3章を紹介し、私見を述べた。

Rosemarie Bodenheimer は 'Dickens and the Knowing Child' において、ディケンズの描く子どもは、子どもが知るべきではない知識を実は既に持っており、子どもは無垢であるべきという概念を犯さないようにするため、その知識を否定しながら子どもであるふりをしており、それゆえ彼らは成長などしていないのだと主張している。この大胆な論は、無垢な子どもの描写が、一筋縄ではいかない複雑な要素を孕んでいる点を浮き彫りにしてくれるのが大変興味深い。

Jonathan Buckmaster による "'Ten thousand million delights": Charles Dickens and the Childhood Wonder of the Pantomime Clown'は、ディケンズが子どもの頃に見たパントマイムのクラウンの記憶が、彼の作品にいかに表れているのかに関する考察である。筆者は特にクラウンの過剰な食に注目しており、それが作品に現れた例として、グリムウィグが頭を食べるとオリヴァを脅す場面を本発表では紹介した。グリムウィグのように子どもとは一見かけ離れたような人物の描写にさえディケンズの子ども時代からの影響が見られるという主張に、子どものテーマの広範囲な様を思い知らされた論考であった。

Wu Di による 'Child Readers in Dickens's Novels' からは、デイヴィッド・コパフィールドの読む行為の描写にまつわる考察を紹介した。筆者は、書かれたことを文字通り受け取る読み手から、書き手の意図を読み取る成熟した読み手へと変貌するデイヴィッドの発達過程を追い、最後はデイヴィッド自身が書き手となることで、子ども時代の読む行為では達成できない現実とロマンスのギャップを埋

めていくのだと結論づけている。発達過程を追う中で、得た知識を活用して周囲に認められることが学習意欲に繋がる様を、筆者がデイヴィッドの読書体験から読み取っているところに現代の教育にも通じるものがあるのではないかと感じた、以上、本書は、「子ども」の描写が、未だに多くの切り口から多様な反応を引き出すことを可能にするテーマであることを示す研究書である。

懇 親 会

懇親会は神戸市外国語大学三木記念会館での立食パーティーでした。いくぶんこじんまりとした会ではありましたが、その分当日のプログラムの感想なども交え、会員同士ゆっくりと談笑することができました。二次会、三次会もあったようです。(松本靖彦)

2019 年度春季大会報告

The Japan Branch Spring Conference 2019

at F-103 Francisco Building, Seisen Jogakuin College, Nagano

日時:2019 年 6 月 8 日 (土) 会場:清泉女学院短期大学 フランシスコ館 103 教室

今年度の春季大会は、長野の清泉女学院短期大学で開催されました。丘の上のキャンパスはとても綺麗で、静かで落ち着いた環境でしたが、寺内先生による大熱弁の刺激的なミニ・レクチャーの後は、Clare Pettitt 先生と Kate Flint 先生によるそれぞれ中身の濃い講演が続きました。息がぴったりのおふたりが和やかな雰囲気をつくってくださったので、質疑応答も実に活気のあるものとなり、大盛会となりました。会場をお世話して下さった村田信行先生をはじめとして、当日の運営にご尽力くださった皆様に御礼申し上げます。(松本靖彦)

第1部 ミニレクチャー Mini Lecture

司会:田村真奈美 (日本大学) Tamura MANAMI (Professor of Nihon University)

『エドウィン・ドルードの謎』をどう読むか A Reading of *The Mystery of Edwin Drood* 寺内 孝 (独立研究者・出版工房奥山舎代表)

Takashi TERAUCHI

(an independent scholar/the president of Ouzansha Publishing)

第1部のミニ・レクチャーでは、会員の寺内孝氏により『エドウィン・ドルードの謎』の解釈の一つの試みが披露された。寺内氏は近年、クリスチャンとしてのディケンズの宗教観を探りつつ、それが作品の中にいかに表れているかを明らかにする研究を続けており、今回の講演もその成果に基づいたものであった。テクスト及び関連する文献を丹念に読み込み、準備に十分時間をかけたことがうか

がわれる内容であった。当日の参加者にとっては、14ページに及ぶ詳細なハンドアウトからもその充実ぶりが感じられたことであろう。さらに、寺内氏の講演スタイルは、ふとディケンズの公開朗読を連想させるような、身振り手振りをまじえた熱の入ったもので、聴衆は寺内氏の話しぶりを楽しみつつ、講演を傾聴することができた。(田村真奈美)

『エドウィン・ドルードの謎』は月刊 12 連載と計画されたが、ディケンズの死で 6 連載で終わる。ゆえにフォースターは『チャールズ・ディケンズ伝』でこれを「未完 ('unfinished')」と記したが、小説は完結している。

ドルードとバッドは親同士が決めた婚約者である。だが二人は何度デートを重ねてもすれ違いばかり、バッドの後見人で弁護士グルージャスは、優柔不断のドルードに「心配の棘」を見出し、「棘はついには抜けますように! (May it come out at last!)」と.

結局二人は婚約を破棄し別れ際にキスをする。それを木陰から見たジャスパーは、彼らは結婚に踏み出すと誤解する。ジャスパーはドルードの叔父で後見人だが、バッドへの熱愛のあまり、翌日深夜にドルードを殺害し、遺体を大聖堂地下室の石棺に入れ、生石灰で遺体を溶かすという完全犯罪に出る。

犯行3日後,グルージャスはジャスパー宅に立ち寄り、二人の婚約解消を伝えるとジャスパーは仰天する。グルージャスは彼に深刻な疑念を抱くのである。

グルージャスの書記バザードは劇作の才人で悲劇『心配の棘』を書いた. バザードもグルージャスもその棘は「ついには抜けると思う (Mr. Bazzard hopes—and I hope—that it will come out at last.)」と.

事件半年後、クロイスタラムにダチェリーという男が現れる。彼はバザードの変装した姿で、ジャスパーの動静を探りに来たのだ。ゆえに彼は「配置違い (misplaced)」でロンドンにいない。

他方, クロイスタラムではバッドがジャスパーに言い寄られ, グルージャスに 保護を求める. 彼は「あの野郎! (Damn him!)」と.

ドルード殺しの犯人を突き止めるのはロンドンのアヘン窟の女である. ジャスパーは彼女の常連客で, ある時昏睡状態でドルード殺しを喋る. 彼女は彼を追跡し. 門番小屋近くで見失い. ダチェリーと邂逅し. 彼の情報を得る.

翌朝,彼女は大聖堂へ行き,彼が聖歌隊長であることを突き止め,ダチェリーに伝える.

ダチェリーはまっすぐ帰宅し、食器棚の戸を開け、戸にチョークで書き溜めていたメモに太い線を上から下まで加え、朝食を旨そうに食べ始める。 棘は抜けたのだ、小説は完結している.

ディケンズはジャスパー同様,二重人格者.彼には痛い心配の棘があり、その棘ゆえに、彼がジャスパーの受けるべき罰を引き受けたように見える.

第2部 講演 Lectures: "Ephemeral Dickens"

1. 司会: 玉井史絵 (同志社大学) Fumie TAMAI (Doshisha University)

Print and Performance in Dickens's Sketches by Boz 講師: Clare PETTITT

(Professor of Nineteenth-Century Literature & Culture, King's College London)

今回の二つの講演を結ぶテーマは "Ephemeral Dickens" である. Pettitt 氏の講演では *Sketches by Boz* (以下 *SB*) に焦点をあて, ephemeral な印刷物で溢れる当時の社会・文化のなかで, Dickens の *SB* が何を成し遂げ, それがいかなる意味を持っていたのかを論じた.

Pettitt 氏はまず、SB が生まれた当時のメディア文化について触れ、SB が生まれた時代背景を描出する。当時のロンドンは、月刊、週刊、日刊新聞ばかりではなく、ブロードサイド、アルマナック、バラッドなど、様々な種類の印刷物が街角で売られていた。これらに演劇、人形劇、ショーなどが加わり、新しい文化環境が生まれつつあった。Pettitt 氏は、当時の文化について考えるとき、こうした多様なメディアの存在を意識する必要があると説く。

次にPettitt氏は、当時の人々がどのようにテクストと出会ったのかを検討する. 印刷物は一般民衆にとっては高価な商品で、多くの場合、人々は回し読みによってテクストを共有した. Dickens は階級による読書形態の差異にも敏感で、SBには様々な形で読書する人々が描かれている. そして、SB自体も異なる新聞に掲載され、海賊版が出たり抜粋の形で再録されたりすることで、当時の社会に広く行き渡っていった.

最後に Pettitt 氏は Dickens が SB で何を成し遂げたのかを考察する。 Dickens は それまで描かれることのなかった民衆たちも含めた、異なる階級に属する雑多な 人々の姿を描き、すべての人々を包摂しようとする。 SB では芸術、労働、ドラマが複雑に絡み合いつつ、日常生活のパフォーマンス生みだされる。 周縁部にいた人々までもが存在感を示すことを可能とする Boz の技量は、第一次選挙法改正後、民主主義が進展する社会において、切に求めてられていたものであった。なぜなら、民主主義とは単に政治形態を指すのではなく、人々の共同体への参加をも意味するからである。 SB は読者が自らを「市民」とみなし、歴史における行為者であると認識するよう誘う。その意味で SB は民主主義の進展の強力な原

動力となったのである.

Pettitt 氏は講演の中で、フランスの哲学者 Jacques Rancière が提唱した"the (re)distribution of the sensible" (感性的なものの (再) 分割) という概念を援用しつつ、SB における Dickens の革新性は、政治的参加以前に、時間的・空間的に共同体から排除されていた人々を包摂したことにあると主張した。時代の転換点にあって急速に変貌するロンドンのダイナミズムのなかで、若干 20 歳の才気溢れる作家のペンから生み出された SB の魅力に改めて気づかせてくれた講演であった。(玉井史絵)

"What inexhaustible food for speculation, do the streets of London afford!" exclaims Dickens in Sketches by Boz. These short miscellaneous sketches of London life in the 1830s did not start life as a series: Dickens tells us that, "their original appearance" was "in different periodicals", reaching different readerships, Sketches by Boz is fascinated by the paper ephemera of which it formed, on its first outing anyway, a part. The Morning Chronicle, in which some of these sketches first appeared, is one of the newspapers hawked on the London streets in the sketch, 'Early Coaches': "you are assailed on all sides with shouts of 'Times, gen'lm'n, Times,' 'Here's Chron — Chron,' 'Herald, ma'am, ' 'Highly interesting murder, gen'lm'n,' 'Curious case o' promise, ladies.'" Sketches finds print strewn around everywhere it goes. From the law student's sitting room in Gray'sinn-square, with its "strange chaos [of] ...caricatures, albums, invitation-cards ...[and] cardboard drawings," to the women's ward in Newgate Jail, where, "texts from Scripture" are "scattered about the room in scraps", to the advertising "squibs" nailed up in the streets, paper is discovered everywhere in this text. But print does not necessarily signify reading in *Sketches*. Instead, it seems entwined with visuality and performance. Dickens's "little" people in Sketches by Boz experience print not as informational, twodimensional, and ephemeral like the newspaper, but rather as one medium in a multimedia virtual London that was growing in scale and complexity alongside the built city.

2. 司会:金山亮太 (立命館大学) Ryota Kanayama (Ritsumeikan University)

Pavement Art and Impermanent Fiction 講師: Kate FLINT

(Provost Professor of Art History and English, University of Southern California)

フリント教授の講演は、*All the Year Round* の 1862 年クリスマス号に掲載された、路上にチョーク画を描く大道芸人を語り手とする "His Brown Paper Parcel"

を題材に、1860年代のディケンズが「短命の」芸術にどのような関心を寄せていたかを多面的に探ろうとするものであった。当時の挿画を参照しつつ、雨が降れば消えてしまうような儚い芸術を作り出そうとする主人公の内面に寄り添いながら、実は多くの「書かれたもの」も同様に読み捨てにされる可能性があった当時の状況にも触れ、ディケンズ自身が自らの戯画をこの大道芸人に投影している部分があるという興味深い解釈が提示された。質疑応答の場においては、無名の人物の文章を作品中に挿入するという彼の初期の長編小説に見られる傾向や公開朗読、著作権問題、あるいは当時の広告の内容にまで質問が及び、今回のテクストが喚起した問題意識が広範囲に及ぶことが裏付けられた。(金山亮太)

This paper explores the implications of "His Brown Paper Parcel," a short story that Dickens wrote in 1862 when Wilkie Collins failed to deliver his contribution for Somebody's Luggage, a collection of short tales published in the Christmas number of All the Year Round that year. On the surface, this story is an entertainment, a relatively insubstantial and undemanding read. The main part of the tale is narrated by a pavement artist: one who makes his living through drawing images with chalk on sidewalks—a highly ephemeral form of art. I ask why Dickens should have chosen to write a story about such a figure — a story itself as ephemeral, in many ways—given the context of its publication—as an image chalked on a paving slab? To answer this, I look at the whole context of this genre of artistic expression—or this way of life, and the showmanship involved—in C19th London. I explore the issues of execution and performance; originality and derivation; display and cliché, exhibition and publics that are thereby raised. Finally, I turn back to Dickens's concerns as a writer in the early 1860s, and suggest why this apparently slight tale can be seen as dramatizing a number of issues that were especially preoccupying to him—not least in the context of transatlantic reception of his shorter work. In other words, I will be considering the correspondence between erasable art, discardable fiction, and the circulation of literature in both print form and in performance.

懇 親 会

懇親会は、長野市内のイタリア料理店 LOGIC で開催されました。参加者も多く、プログラムの熱気をそのまま持ち込んで、わいわいがやがや大盛り上がりの大宴会となりました。Pettitt 先生と Flint 先生も素敵なスピーチで花を添えてくださり、ちょっと特別なフェロウシップの一夜なりました。熱気の冷めやらぬまま有志たちは二次会の居酒屋へ、ここでもこじんまりとわいわいがやがや、楽しい歓談の時を過ごしました。長野でのフェロウシップ、もちろん三次会もあったようです。(松本靖彦)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

Rules, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日 改正 2000 年 6 月 10 日 改正 2005 年 12 月 1 日 改正 2018 年 10 月 13 日

第1章 総則

- 第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する.
- 第2条(会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、 日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以って組織する.
- 第3条(所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く.
 - (2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。
 - (3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める.
- 第4条(設立日) 本会の設立日を1970年11月12日とする.

第Ⅱ章 目的および事業

- 第 5 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をは かることを目的とする.
- 第6条(事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
 - 1. 全国大会および研究会の開催.
 - 2. 機関誌の発行.
 - 3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること
 - 4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

第Ⅲ章 役員

- 第7条(役員) 本支部に次の役員を置く.
 - 支部長1名, 副支部長1名, 監事1名, 財務理事1名, 理事若干名.
- 第8条(役員の職務) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる.
 - (2) 副支部長は支部長を補佐する.
 - (3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。
 - (4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。
- 第9条(役員の選出および任期) 役員の選出は、理事会の推薦に基づき、総会において これを選出する.
 - (2) 役員の任期は3年とし、連続2期6年を越えて留任しない。
 - (3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。

(4) 役員に事故がある場合は補充することができる. その場合, 補充者の任期は前任者の残任期間とする.

第11章 会議

- 第10条 (議決機関) 本支部には議決機関として総会, 臨時総会, 理事会を置く.
- 第11条(総会) 総会は本支部の最高議決機関であり、支部長がこれを招集する.
 - (2) 総会は、役員の選出、事業の方針、予算、決算、規約の変更など、支部運営の重要事項を審議する。
 - (3) 総会の議決は出席会員の過半数による.
 - (4) 総会は原則として年に1回開催する。臨時総会は必要に応じて開催する。
- 第12条 (理事会) 理事会は本支部の執行機関として支部長が随時これを招集し、本支部の目的達成上必要な事項を審議する.

第 V章 会計

- 第13条(経費) 本支部の経費は、会費、寄附金、その他の収入を以ってこれにあてる。
- 第14条(会費) 会員は、本支部の運営のため、別に定める会費を負担する、
- 第15条 (会計報告および監査) 本支部の会計報告ならびに監査報告は,毎年1回,総会で行う.
- 第16条(会計年度) 本支部の会計年度は10月1日より翌年9月30日までとする.

付則

(1) 本支部の支部長、副支部長、監事および財務理事は次の会員とする.

支部長神戸市灘区篠原北町 3 丁目 8 番 8 号新野緑副支部長埼玉県越谷市瓦曽根 1-4-22-407松本靖彦監事埼玉県新座市栄 5-7-13梅宮創造財務理事東京都目黒区東が丘 1-2-5田村真奈美

- (2) 本支部の事務局は、神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学外国語学部英米学科 新野緑研究室に置く
- (3) 本支部の財務事務局は,東京都千代田区神田三崎町 1-3-2 日本大学経済学部 田村真 奈美研究室に置く.
- (4) 本支部役員の氏名、住所、所属研究機関に異動があったときは、この付則にある該当 事項は、総会の議を経ることなく、変更されるものとする。
- (5) この規約は2018年 (平成30年) 10月13日から適用する.

* * * *

※会員にはロンドン本部機関紙 (The Dickensian) (年 3 回発行) および支部『年報』(年 1 回発行) を送ります

※会費の支払いは、郵便振替でお願いいたします。(振替番号 00130-5-96592)

『年報』への投稿について

※ 2018年より論文投稿規程に変更がありますので、ご注意下さい.

論文投稿規定

- (1) 論文は日本語,英語いずれも可(英文の場合は事前にネイティヴ・スピーカーによるチェックを受けてください).
- (2) 論文の長さは、原則として、日本語の場合は 18,000 字 (400 字詰原稿用紙換算 45枚) 以内、英語の場合は 7,000 語以内とします。
- (3) 論文原稿の締切は6月10日(必着). 編集担当理事の審査(採・否・再提出)をへて受理・掲載します。
- (4) 論文原稿は、原則として電子メールにより添付ファイルとして、副支部長宛に提出してください。(アドレスは日本支部ウェブサイトにあります。) 電子メールが利用できない場合には、清書原稿3部(コピー)を副支部長宛送付してください

論文の書式について

- (1) 書式の細部については、原則として、MLA Handbook の最新版に従ってください。 最終的な書式形式は編集で統一します。
- (2) 註については、脚註ではなく、尾註を用いて下さい.
- (3) 文献表については、引用した文献を、論文の末尾に付けて下さい。
- (4) 日本語論文で欧米人名を「サッカレー」などと日本語表記する場合には「サッカレー (William Makepeace Thackeray)」とカッコ内に原語を表記してください.
- (5) ディケンズの著作・登場人物名については、日本語表記する場合でも、原語を示す必要はありません、示す場合は、上記 (4) に従って一貫して表記してください。
- (6) 数字については原則としてアラビア数字としてください. (例:「一九世紀→19世紀」, 一八一二年→1812年). ただし,「一人や二人」や「一度や二度」などは例外とします.) 章分けにはローマ数字を用いることができます.

論文以外の書評. 国際学会報告等

- (1) 締切は8月10日です. 原則として電子メールにより, 添付ファイルを副支部長宛に送付してください. 電子メールが利用できない場合は, 清書原稿1部を送付してください.
- (2) 書式については、論文とは異なり、原則として著者の自由です。ただし、数字表記については論文と同様アラビア数字とします。
- (3) 長さは、書評 6,000 字 (原稿用紙換算 15 枚) 以内、国際学会報告 4,000 字 (原稿用 紙換算 10 枚) 以内、国際学会報告の写真の添付は 4 枚以内とします。写真は可能 なかぎりデジタル・データをご提供ください。
- (4) 編集上の都合により採用できない場合もあります。また、編集担当者の責任で内容を大幅に編集する場合があります。あらかじめご了承ください。
- ※論文・一般記事等を問わず、すべての原稿に「英文タイトル」と「著者名のローマ 字表記」を必ず付記してください。
- ※〈原稿の文字カウントについて〉ウィンドウズの場合は、「校閲」メニューの「文字カウント」で、また、マックの場合は、「ツール」メニューの「文字カウント」で、注や参考文献を含めて、投稿規定で定められた長さに収まっていることを、必ず確認して下さい、英語の場合は「単語数」、日本文の場合「文字数(スペースを含めない)」です。

ディケンズ・フェロウシップ会員の執筆業績

Publications by Members of the Japan Branch (2018~2019)

著書・編書・共著

天野みゆき・市川千恵子・川崎明子・木村晶子・田村真奈美・新野緑 (共著) 『めぐりあうテクストたち —— ブロンテ文学の遺産と影響』春風社. 2019.7.

猪熊恵子・松岡光治・西垣佐理・木村晶子・大前義幸 (共著) 『比較で照らすギャスケル 文学 —— 創立 30 周年記念』大阪教育図書、2018.10.

梅宮創造 『ブロブディンナグの住人たち』 彩流社、2018.11.

梅宮創造 『英国の街を歩く』彩流社、2019.6.

船場弘章 『こんにちは、ディケンズ先生(改訂版)』幻冬舎、2018.11.

寺内 孝 『キリスト教の発生 ―― イエスを超え、モーセを超え、神をも超えて』奥山舎. 2018.11.

[堀 正広] (共著) Masahiro Hori et. al A Chronological and Comparative Study of Body Language in English and American Literature. Kaitakusha. 2018. 10.

[掘 正広] (共著) Masahiro Hori et. al *The Pleasure of English Language and Literature*. Keisuisha. 2018. 12.

堀 正広 (共著) 『言語分析のフロンティア』 金星堂、2019.1.

[掘 正広] (共著) Masahiro Hori et. al *Haiku as Life : A Kaneko Tohta Ominibus.* Red Moon. 2019. 3.

堀 正広 『はじめての英語文体論 —— 英語の流儀を学ぶ』 大修館、2019.4.

中田元于 『乳母の文化史 —— 一九世紀イギリス社会に関する一考察』人文書院. 2019.1.

松岡光治 (編) 小宮彩加・吉田朱美・中田元子・玉井史絵・金山亮太・田中孝信・木村晶子・松本靖彦・新野緑・楚輪松人・宮丸裕二・麻畠徳子・三宅敦子・橋野朋子(共著) 『ディケンズとギッシング―― 底流をなすものと似て非なるもの』大阪教育図書。2018.12.

論文

勝田悠紀 「ポータブル・キャラクターズ —— ディケンズの複製技術」Reading. 39. (2019. 3): 71-88.

川崎明子 「『二都物語』における気絶と斬首」『英米文学 (駒澤大学文学部英米文学科論集)』53. (2018.9): 31-48.

川崎明子 「『嵐が丘』における〈愛する能力〉」『ブロンテ・スタディーズ』6.4. (2018. 11):95-110.

川崎明子 「コンラッド小説における病いと看護」 『英国小説研究』 27. (2019.5): 72-92.

- 小宮彩加 「汚いはきれい? ディケンズとギッシングのスラム街の考察」『明治大学教養論集』 通巻 533 号 (2018.9): 41-54.
- 筒井瑞貴 「"The Perils of Certain English Prisoners" における抑圧された欲望」『神戸英米論 叢』32. (2019.2): 25-35.
- 吉田一穂 「Daniel Deronda デロンダによるグエンドレンへの精神的感化とユダヤ教への理解」『人間文化研究 高橋ひとみ教授退任記念号』10. (2019.2): 17-40.
- 吉田一穂 「『ミドルマーチ』――〈妻として夫を援助すること〉とドロシアの二回の結婚」 『Fortuna』 30. (2019.3): 3-15.

翻訳

梅宮創造(訳)『イノック・アーデンの悲劇・他』大阪教育図書。2018.11.

田辺洋子 (訳) 『ディケンズ寄稿集』 渓水社. 2018.10.

武藤美代子 (共訳) 『ショーン・オフェイロン短編小説全集 (第4巻)』新水社. 2018.8. 村田信行 (共訳) トーマス・W・アルフォード (著) 『インディアンの「文明化」ショーニー族の物語』刀水書房. 2018.12.

会員業績報告についてのお願い

次号に掲載する会員の業績報告は随時受け付けております。2019年8月から2020年7月までに、著書・編著・共著・論文・翻訳を刊行された会員の方は、上に掲載の書式に従って、必要情報を日本支部HPの業績フォームを通じて、あるいは副支部長宛メールにてお知らせ下さい。43 号掲載の業績報告の締め切りは、2020年7月末日です。ご協力のほど、よろしくお願いします。

書評対象図書及び評者・国際学会報告者の募集

『年報』の書評では、ディケンズ及びディケンズと関係の深いヴィクトリア朝文学・文化関係の書籍を扱っております。国内・国外を問わず、取り上げるべき本がありましたらご推薦下さい。評者についても自薦・他薦・著者本人の推薦のいずれも歓迎です。随時受け付けておりますが、次号への掲載を希望される場合、2月末日までに御連絡をお願いします。また国際学会に出席される予定の方には、国際学会報告をお願いしたいと存じますので、学会開催の3週間前までに、御連絡下さい。いずれも副支部長までお申し出下さい。よろしくお願いいたします。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 お問い合わせ先

〒 651-2187 神戸市西区学園東町 9-1 神戸市外国語大学 新野緑研究室

URL: http://www.dickens.jp

ディケンズ・フェロウシップ日本支部の活動および会員の情報につきましては、 上記のいずれかにお問い合わせ下さい。新規入会希望の方も随時受け付けております。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部では「支部規約」に従い、2017 年総会において選出された以下の役員、および名誉職・補佐職を以て、運営にあたっています。

役員の任期は 2017 年 10 月より 2020 年 9 月までです

名誉支部長 小池 滋 東京都立大学名誉教授

支部長 新野 緑 神戸市外国語大学外国語学部教授

副支部長 松本 靖彦 東京理科大学教授

 理事 (財務担当)
 田村真奈美
 日本大学教授

 理事
 鵜飼 信光
 九州大学教授

 理事
 金山 亮太
 立命館大学教授

理事 玉井 史絵 同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授

理事 中村 隆 山形大学教授

理事 (Net 担当) 松岡 光治 名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授

監事 梅宮 創造 早稲田大学教授

VOD 担当補佐 渡部 智也 福岡大学准教授

橋野 朋子 関西外国語大学講師

西垣 佐理 近畿大学准教授

書誌作成担当補佐 大前 義幸 岩手県立大学宮古短期大学部講師

文献作成担当補佐 長谷川雅世 高知大学講師

大会案内作成担当補佐 木島菜菜子 平安女学院大学助教

『年報』編集委員 松本靖彦 (委員長)・鵜飼信光・金山亮太・玉井史絵・中村 降

編集後記

『年報』42号をお届けします。今回は、たいへん寂しいことに論文の投稿がありませんでした。次号には是非とも3編程度の研究論文を掲載いたしたく存じます。みなさま、どうぞ奮ってご投稿ください(昨年度より論文投稿規定に変更がございますので、ご確認お願いいたします)。

その一方で、今号は Fellowship's Miscellany 欄に劇評のご寄稿がありました。次号の同欄にも劇評に限らず、映画 (TV・ラジオドラマ) 評や国際学会報告、ディケンズ (周辺) についてのエッセイなど、どしどしご寄稿いただけましたら幸いです。その他の情報や企画につきましても面白いご提案がおありの方は、お気軽に副支部長宛お知らせください。 (松本靖彦)

ディケンズ・フェロウシップ日本支部年報 第 42 号

発 行 2019年12月10日 ディケンズ・フェロウシップ日本支部 代表 新野 緑 〒651-2187 神戸市西区学園東町9-1 神戸市外国語大学 新野緑研究室

印 刷 明文舎印刷株式会社

The Japan Branch Bulletin of the Dickens Fellowship

No. 42

ISSN: 1346-0676

Edited by Yasuhiko Matsumoto Editorial Board

Ryota Kanayama Yasuhiko Matsumoto Takashi Nakamura

Fumie Tamai Nobumitsu Ukai

Published annually by the Japan Branch of the Dickens Fellowship Department of English Studies, Kobe City University of Foreign Studies 9-1, Gakuen Higashimachi, Nishi-ku, Kobe 651-2187, Japan

http://www.dickens.jp/

©2019 The Japan Branch of the Dickens Fellowship